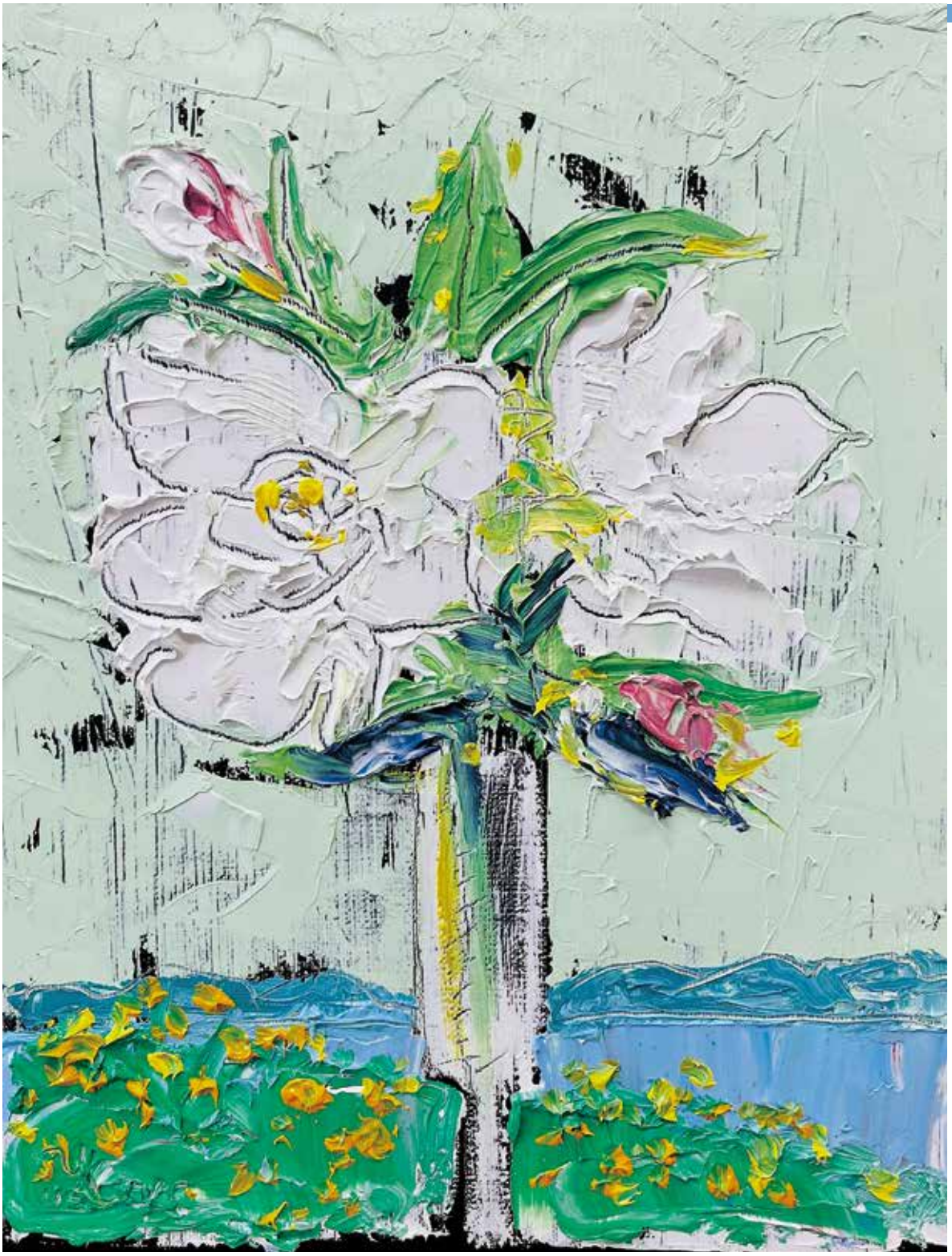
いしづち

2023.5
MAY
No.152

公益社団法人 愛媛県建築士会
Ehime Society of Architects & Building Engineers
http://www.ehime-shikai.com



コピペ建築
道後温泉の遊郭について（後編）
世界建築紀行 タージマハールへのインド旅（アーグラー編）

ISHIZUCHI
Ehimeken kenchikushikai
2023 5
MAY No.152

CONTENTS

1 コピペ建築 道上壯／ＶｕＡ……①

2 道後温泉の遊郭について（後編） 一級建築士 野本 健……③
文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……③

3 世界建築紀行 タージマハールへのインド旅（アーグラー編） 西予支部 松山 清……⑨

4 経済・産業視察 ドバイ・オマーンへ経済・産業視察 会長 尾藤 淳一……⑮

5 委員会活動報告
愛媛の登録有形文化財 第４回「旧八木商店本店店舗他４件」
文化財・まちづくり委員会 副委員長 曽我部 準……⑰
古学堂見学会に参加して ヘリテージマネージャー 笹木 篤……⑲
中四国まちづくり委員長会議報告 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……㉑
全国まちづくり委員長会議報告 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……㉓
法華寺山門（大洲市）調査報告 文化財・まちづくり委員会 委員 菅野 隆次……㉕
建築市民講座「日暮別邸記念館と住友山田社宅」
文化財・まちづくり委員会 中山百合子……㉙
文化財・まちづくり委員会 和田 卓巳……㉚
松山支部 相原 昌彦……㉚
文化財・まちづくり委員会報告 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……㉛
とびだせ建築士「橋をつくろう」2022年度 青年委員会 委員 髙木 伸幸……㉜
愛媛県建築士会創立70周年記念講演会「伊礼智講演会～心地よさのものさし～」
青年委員会 委員長 和田 崇……㉝
愛媛県建築士会 創立７０周年記念講演会の裏側
松山支部 青年・女性委員会 委員長 白石 学……㉝

6 支部報告
建築士の日の行事「住宅無料相談会」 四国中央支部……㉟
「建築無料相談会」 八幡浜支部……㉟
道後地区勉強会「それって「雨漏り」?「結露」?住宅をいつまでも健全に保つために!」
松山支部 道後地区地区長 相原 昌彦……㊱

7 けんちくの輪
なんとなく、それなりに 松山支部 仙波 完太……㊲
世界遺産を訪ねて 八幡浜支部 東野 淳……㊳

8 お知らせ
令和４年度 第６・７・８回理事会概要報告 事務局……㊴
事務局長就任のご挨拶 事務局長 池内 誠喜……㊷
年会費納入のお願い 事務局……㊷

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

油 彩 画

題：「西宇和のみかん」

西宇和での温州みかんの栽培は明治28（1895）年に始まり、山を耕し段々畑をつくっていきました。

この地域は、海岸部に典型的なリアス式海岸が続き、内陸部では起伏のある傾斜地が多く、平地が少ない地形が特徴です。

西宇和みかんとは、愛媛の最西端に位置する西宇和地域で生産される、みかんの総称です。昭和39年に真穴地区、平成8年に川上地区が、2度の天皇杯を受賞したのをはじめ、さまざまな賞を受賞しています。西宇和みかんはその品質の高さで名高い一品です。(JAにしうわHPより)

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞
（愛媛県建築士事務所協会主催）
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」
（新潮社）の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞（東京／日動画廊）
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」収蔵される
2015～17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「㈱リチェルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員／審査員

コピペ建築

道上壯／VuA

House_EY

「コピペ」とは、コピー＆ペーストの略で、オリジナルを複製して別の場所に貼り付けることだ。今、世の中では、検索と並んで頻繁に行われている行為だ。メリットとデメリットがありながらも急速に広がりつつあり、建築もその大きな濁流に飲み込まれようとしている。

コピペ建築は、昔から存在していた。建築が雑誌に掲載されると、写真・図面・設計趣旨・批評・その他が情報として公開される。それらをそのまま、まるで自分が考えたかのように建築をつくる人たちは数多くいた。一般の人たちは建築雑誌など見ていないので、オリジナルなのかコピペなのかを判断することもなく、自己満足度を評価としていた。もちろん、コピペ建築が全国誌に掲載されることはないので、オリジナル設計者の目に触れることもなく、地方の建築をビジネス的に支えるツールとして暗躍してきたという歴史もある。

コンクリート打ち放しの建物が掲載されると、雨後の筍のようにコンクリート打ち放しの建物が林立した。鉄板を構造体とした住宅が発表されると、猫も杓子も鉄板を使って建築を構成した。敷地内に建物をバラバラに切り離して配置した集合住宅が報道されると、何でもかんでもバラバラに切り離して配置することが重宝された。そこには、法的には責任を問われない範囲内でのオウム返しが、延々と繰り返されていた。

Museum_HT

コピーとペーストの間に本質的変換を加えることが大切だ。表面的な変換は、単なる模倣でしかない。本質を新しく考え直すことでオリジナルになる。模倣は狭い範囲での評価しか受けないが、オリジナルは広い範囲での評価を受ける。現在、日本のモノづくりが衰退している一要因に、このオリジナルの欠如がある。建築も然り。世界的な建築家を最も多く輩出している日本だが、一般の建築のレベルは極めて低い。それらの責任は、市井の建築に携わる僕たち一人ひとりにあるのだ。

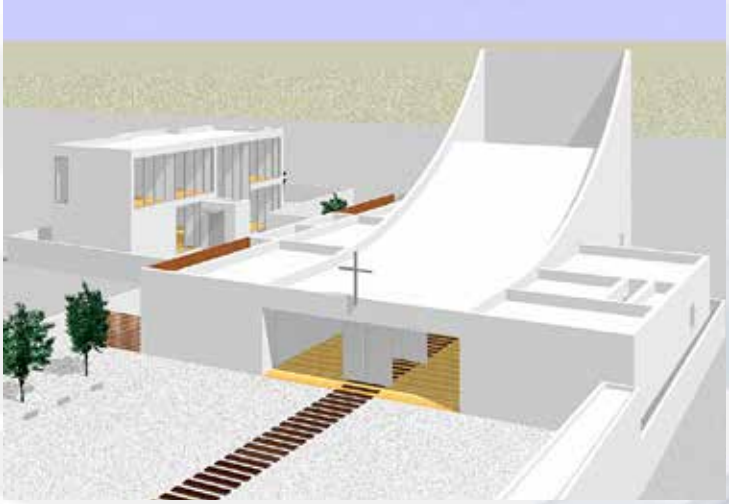
僕は専門学校と大学の講義・実習で、生徒たちにオリジナルを考えることに取り組んでもらっている。もちろん、直ぐに出来るようになるわけではなく、長い道のりのスタートを切らせているだけだ。例えば、四角いプランの建築を見たときに「じゃあ丸（○）で考えてみよう！」「三角（△）で考えるとどうなるかな？」「グニャグニャのアメーバーみたいなのって…」「他に何か新しい考え方がある？」こんな風にヒントを与えつつ、新しい答えを見つけたり、辿り着いたり、考え出したりすることをそそのかしている。

最初の頃は、何処かの建築雑誌で見たことのある既視感あふれるそのままの建築だったものが、段々と見たことのない未視感をまとった建築に変わってゆく。建築の学生全員が設計に携わってゆくわけではないのだが、何かをヒントにオリジナルを考えることを身に付けてもらいたいと思っている。それらは、建築に関わらず世の中を生きてゆく上で役立つスキルだからだ。

インターネットで容易に検索が可能になって、僕たちのオリジナルを考える力は急速に衰えていった。何かを考えて生み出すには、膨大な時間がかかる。検索はコンマ何秒かで、世界中の情報を集約することが出来る。もちろん楽ちんな後者に人気が集まるのは自明の理で、クリエイトする人とコピペする人との差は、一昔前よりも更に大きくなってしまった。辛辣な言い方をすれば、創造主と模倣犯ばかりで、善良な市民が雲散霧消してしまったと言えなくもない。

僕がオリジナルを意識し始めたのは３５年ほど前だ。京都の設計事務所に勤め始めた頃だ。学生の頃に建築のカッコよさに憧れて働き始め、段々と建築のつくり方を目にしていった。オリジナルの建築があり、その建築を真似しながらも、オリジナルを超えるカッコよさに仕上げるというものだった。「カッコいいんだが…」僕は少しづつ違和感を覚え、３年余りで東京の設計事務所に移ることになる。そこでは、所長のスケッチもなく参照する建築もなく「スカスカしてるのがいいな」「もっとおおらかで開放的にしよう」所長の言葉を頼りに、ただただ建築を考えるという日々だった。

２６歳から建築を始め、３８歳から自分自身で建築を考え始め、遅きに失する感は否めないが、それでも僕はずっと建築のオリジナルについて考えている。そしてそれを、これから建築に携わってゆく人たちにも考えて欲しいと思っている。建築の全てをオリジナルにすることは難しいが、コピーとペーストの間に新しい息吹を吹き込むことで、建築はグッと斬新になる。世界的な建築家たちも、膨大な時間をかけたこのほふく前進で、未知なる建築を生み出しているのだ。



Church_HH

振り返ってみると、建築のパクリの名手たちは全て消えている。一時期なら時代受けするかもしれないが、長い目で見ると、人気アイドルや流行語のように消費されてしまう隘路にある。日本でも世界でもそれは変わらない。それを承知の上でコピペを繰り返す人もいれば、いつまでも続けられると信じている人もいる。僕たちは歴史から学ぶことによって、別の道筋で建築を続けてゆくことを選びたいものだ。

この原稿を書いている時「WBC日本優勝」のニュースが流れてきた。ＭＶＰは大谷翔平選手。大谷選手は子供の頃から野球に関することをノートに書き留め、日々それを眺め、そして実現のために努力を積み重ねてきたそうだ。小さな努力の無限の連鎖が、大谷選手を世界の檜舞台へ立たせたと言えるだろう。市井の僕たちも小さな積み重ねを続けることで、ひとつ上のステージに行けるかもしれない。オリジナルを考えてコピペの魔力から逃れ、新しい建築を目指して。僕たちの合言葉は、コピー、チェンジ、ペースト。

Apartment_KK

THE HISTORY OF DOGO ONSEN
RED-LIGHT DISTRICT

道後温泉の遊郭について

後編

執筆：　一級建築士　野本　健
監修：文化財・まちづくり委員会　委員　花岡　直樹

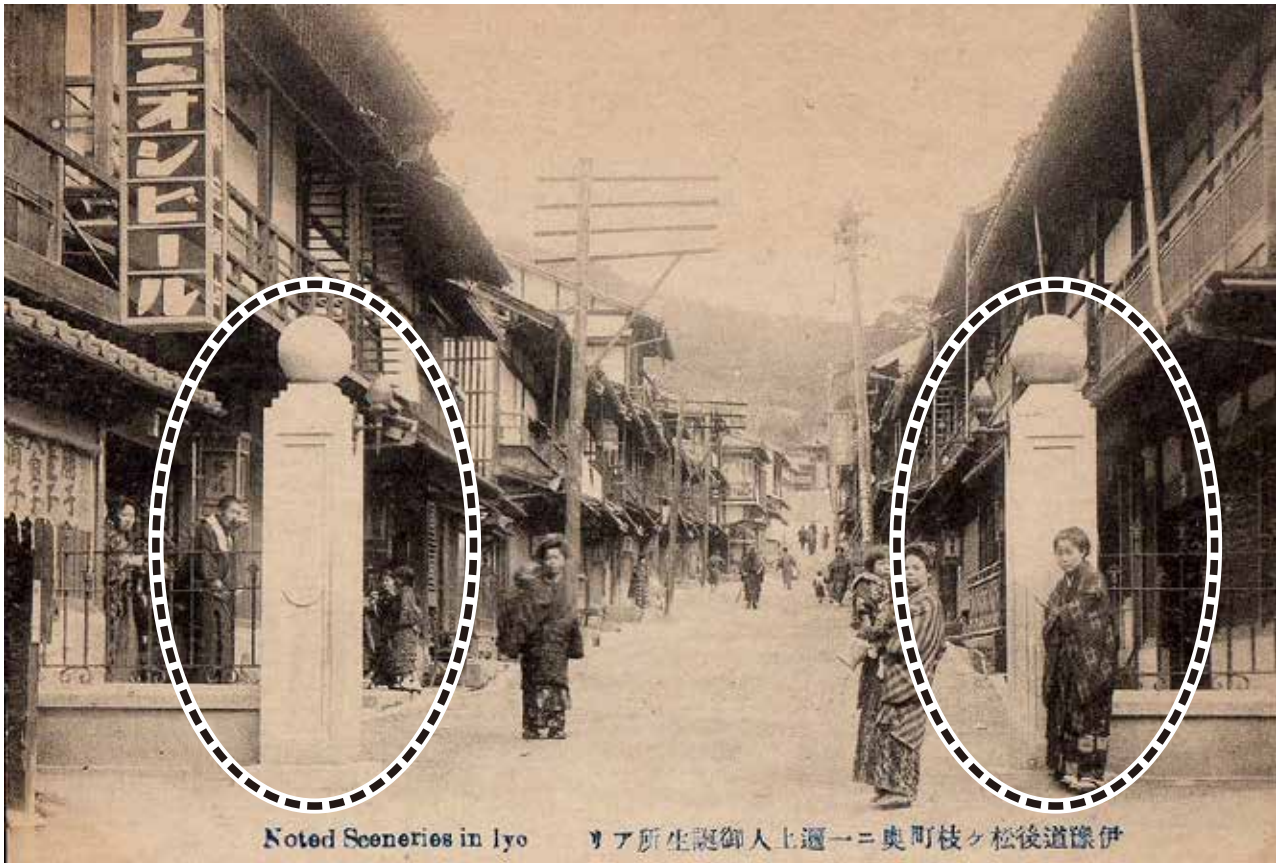
石柱について

古写真を見ると松ヶ枝町の入口の石柱は特徴的であり、大正9年（1920）に「宿屋芸者雇仲居取締規則」を改正したことが影響している。これは芸者の売春がひどいため、遊女に鑑札を与え強制的に病気の検診を行うことが狙いであった。このことにより「娼妓専門」の者と芸者と娼妓を合わせ持つ「二枚鑑札」という者に分かれるのであった。入口にある特徴的な石柱は朝日楼の近くにもあり、入口から2本目の柱までが「二枚鑑札」、2本目の柱から宝厳寺の前までが「娼妓専門」の店に分かれていた。

芸妓芝居について

道後温泉では3月に「湯祈祷」という行事がある。この「湯祈祷」は宝永の大地震の時に温泉の湧出が止まり、再び湧出したことがきっかけで、毎年湯の神に感謝する行事として始まった。

明治に入ってからは「湯祈祷」を「温泉記念祭」と呼ぶようになり、行事を盛り上げるため余興を催すようになった。（現在は道後温泉まつりと呼んでいる）余興は素人の相撲、素人浄瑠璃、盆栽、書画の展示などを行ったが、一番の人気は芸妓芝居であった。芝居小屋は道後温泉本館の前に設置され、道後温泉本館の2階、3階は芸妓芝居を観覧



▲昭和初期の松ヶ枝町（ユニオンビールは大正12年より販売）（提供：二神　將）

昭和初期の道後温泉まつりの様子▲
（提供：道後温泉事務所）

する観客たちで溢れかえっていたそうだ。

この芸妓芝居は湯之町と松ヶ枝町の合同で行っていたが、大正時代に、いざこざがあり、合同で行わなくなった。そのため、道後温泉本館の前は湯之町と松ヶ枝町の芝居小屋がそれぞれ軒を並べ競争をするといった小競り合いが発生したそうだ。

しかし、この小競り合いは双方に不利益だということがわかると今年は松ヶ枝町がやり、次の年は湯之町がやるという隔年でお互い芝居を行うようになった。

遊女たちの日常

大正15年頃（1926）の遊女たちの日常は朝早く泊り客を見送り、午前9時頃に朝食を取る。そして店の掃除を手伝い、午後には道後温泉に入浴し、それから夜までが休憩時間であった。この休憩時間の使い方は人それぞれで、髪を結ったり、化粧をしたり、客を取る人もいたそうだ。午後7時頃から店に出て客を待ち、冬は夜の12時頃まで、夏は午前2時頃まで営業していたそうだ。

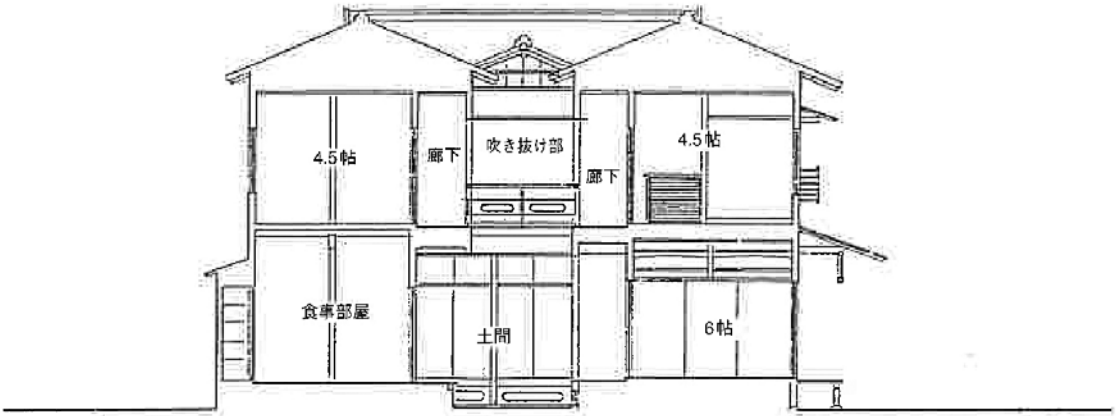
▲松ヶ枝町（提供：二神　將）

朝日楼について

平成19年（2007）に遊郭の建物の趣を多く残していた朝日楼が取り壊された。平成15年（2003）に犬伏武彦先生がこの朝日楼の実測調査を行っている。

▲朝日楼（東面より）
（提供：二神　將）

◀朝日楼（高台より）
（引用：民家と人間の物語）



▲断面図（引用：民家と人間の物語）

木造２階建ての桟瓦葺き。１階は表玄関から裏玄関まで通じる土間続きとなっている。通りに面して「張り店」（格子がはめられ、客を待つ遊女たちを見ることのできる床が板張りの部屋）がある。入口には「帳場」（お金を払う場所）があり、お金を支払って２階に上がる動線となっている。

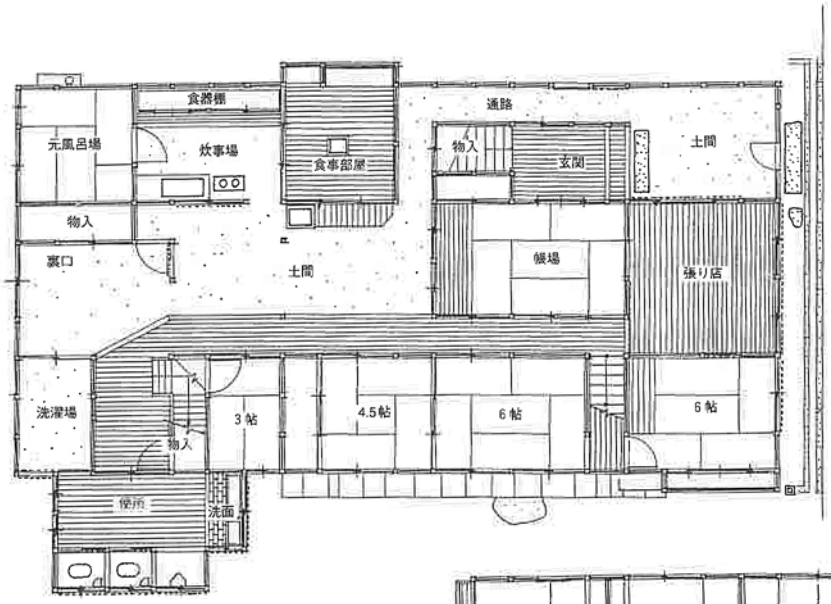
特徴的なのは2階のレイアウトである。2階は回廊式のロの字型４畳半の部屋が12個配置されている。部屋の中は漆喰壁で壁の下部分には汚れなどを防ぐため和紙の下張りが張られている。そして部屋と部屋の間には物入を介することで防音の役割を持たせていた。

また、北側には「散財部屋」（襖を介して３部屋続く大部屋）があり、この部屋は三味線やお酒などを楽しむ宴会部屋として使用されていた。

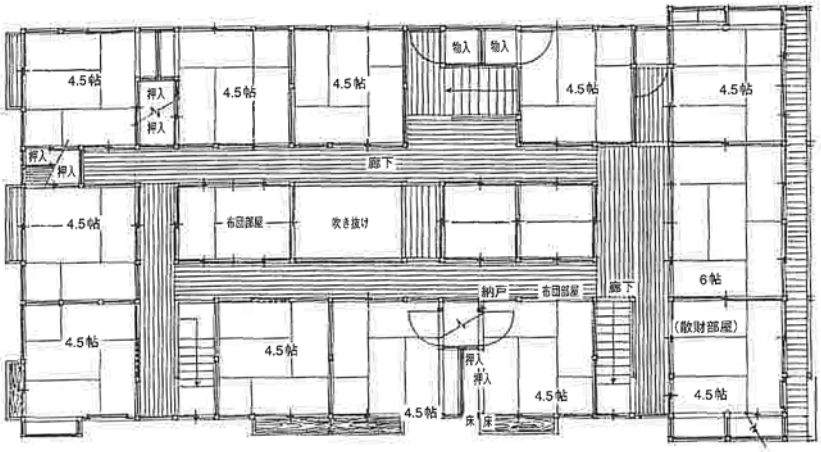
真ん中は布団を収納する部屋と吹き抜けになっている。布団は遊郭では必須であり、片付け等がしやすいレイアウトになっている。また、真ん中に吹き抜けを設けることで１階の女主人から客室の様子を確認でき、さらに２階の客室からはお茶やお酒を頼める仕組みを持っていた。

朝日楼には調理場が無く、宴会の時は料理屋から出前を取り、大きなお風呂が無いのは道後温泉があるからだと考えられている。

犬伏先生の調査資料は遊郭という建物、動線、形態を理解するのに非常に役立った。



◀平面図（１階）



▲平面図（２階）

変わりゆく「上人坂」

道後温泉本館から松ヶ枝町に上がる坂を「ほっちょ坂」と呼んでいた。それは短いが急な坂道で湯上りの足元を包丁で切られたような冷たい風が吹くというところから付いた名前と言われている。その後「ネオン坂」と呼ばれていた坂もネオンの灯が消え、平成22年（2010）に「上人坂」と名前を変えた。

この坂道には平成30年（2018）に俳人である夏井いつきさんの「伊月庵」、令和3年（2021）に「ひみつジャナイ基地」が建設された。

令和４年（2022）には山澤商店の目の前に新たな交流の場となる「坂下広場」が誕生した。昔とは違う、人と人との交流で生まれる新たな発信拠点の場所として「上人坂」は再び人々の賑わいを生みだすべく歩み始めるのであった。

◀ 上人坂（令和４年時点）

ひみつジャナイ基地 ▶

■あとがき

「遊郭の建物を残したい」と言うと「どんなにしても、興味本位で人は遊郭を見ます。みんなしゃんと生きていました。義理人情にあつく、いたわり深く、芸に励み、けじめをつけ、格式を重んじ、家族のように過ごしていたんです。めそめそと弱音なんか吐きません。そんな人間のいたことを伝えられますか?」と問われた。(引用:民家と人間の物語)

度重なる法律の改正により東京で繁栄を極めた吉原の遊郭と同様にこの松ヶ枝町の遊郭も姿・形を変え、かつての趣を感じることはできない。

昔から観光地は人々の趣味・趣向により方向性を何度も大きく変えた。大正時代は多くの観光客を集客するために観光施設を多く建て、昭和後期ではバブル経済を反映するかのように、この道後でも冠山を削りとるなどの大規模な観光施設のレジャー化、令和の現代では自然や歴史に重きを置きながら、散策やまちあるきを楽しむ場所となっている。

このように歴史的な話・物語が観光商品として捉えられ再調査されることは大変意義深いものだが、短絡的な消費をせず、しっかりと人々の文化・歴史に根付いたものを作ってもらいたいと切に願い筆を置く。

■参考文献

「道後温泉 増補版」「海南新聞」
「愛媛県紳士録」「道後で暮らす語り部の記憶」
「道後物語」
「松山有情」
「道後花柳情史」
「移り変わる湯之町」
「道後温泉の研究」
「富田喜平は語る」
「二神鷺泉と道後湯之町」
「民家と人間の物語」
「わすれかけの街」
「勝山花の面影」
「松山市住宅明細図昭和32年」

＊本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

宝厳寺の夕焼け ▶

世界建築紀行 vol.19

タージマハールへのインド旅（アーグラー編）

西予支部 松山　清

1 ムガール帝国栄光の都、アーグラー

インドではデリーから南下しジャイプル、アーグラーの３古都を左回りに周遊してヤムナー川沿いに北上するルートの旅だった。アーグラーはデリーの南約200㎞にある地方都市だが、タージマハールのある町として世界中から多くの観光客を集めていた。アーグラー郊外には1571年から首都として建設されわずか14年で見捨てられたファティープル・シクリという城跡と、第５代皇帝シャー・ジャハーンが息子によって幽閉され生涯を終えたアーグラー城もあり帝国の繁栄を今に伝えていた。

▲タージマハール正面門

2 ムガール帝国の古都ファティープル・シクリ

タージマハールへは翌朝訪れる予定なので、夕方アーグラー到着前に町の37㎞手前に建つ世界遺産ファティープル・シクリを訪ねた。

第3代アクバル帝が造った都で、水が無かったため14年間で廃墟となったが、そのほとんどが傷まないままで残っていた。5年をかけて建設された都は、3km×5kmの広大な土地を城壁で囲み、その中央の丘に宮廷やモスクを赤砂岩で築いた壮大なもので、その建築様式からは皇帝が理想としたヒンズー教とイスラム教の文化的融合が感じられた。

ファティープル・シクリの見学後、大混雑のバスに乗せられて遺跡を下りた後、夕餉の支度の煙が漂うアーグラーへと向かった。

アーグラーの街路は牛糞を家庭の燃料とするため煙が漂い、マナーの悪いトゥクトゥクが猛スピードで走り抜け危険だった。ホテルに無事到着して、歓迎の花かざりを首に架けられるとホッと一安心した。

▲宮廷地区

▲貴賓謁見の間

▲一般謁見の間

道中の道路 ▶

3 ヤムナー河岸に聳え立つタージマハール

マハルは“宮殿”を意味するため宮殿と勘違いされるが、タージマハールは死んだ妃のムムターズ・マハルが変化した呼び名で、巨大なイスラム建築様式の墓だった。2015年11月21日、混雑前に入場するため朝6時半起床。ホテルの朝食はあまり口に合わなかったが、建物は低層で平面的に広い豪華な造りで、ロビーから部屋まで早く歩いても時間がかかる程遠かった。居心地は良くて疲れていたためかよく眠れた。窓から見た芝生の庭も美しく、テラスからそこに出ることもできた。気持ち良く一晩を過ごし午前8時にタージマハールへ向かってホテルを

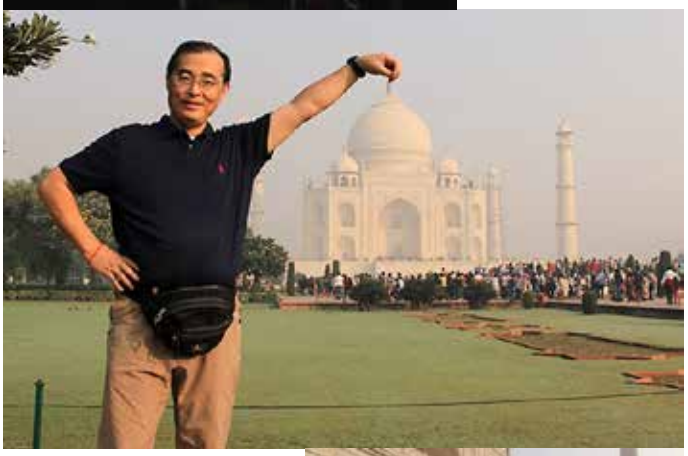
▲開門前の参道

▲正面門から続く回廊

出発。ホテルはアーグラーの南東の外れにあったが、幹線道路がタージマハールまで続いており、あっという間に駐車場に到着。そこでチケットを購入し車を小型のワゴンに乗り換えてタージマハールの入り口まで向かった。この乗り継ぎにいつも時間がかかるらしい。駐車場から立派なタージマハール正面門までは、乗合いの小さな車で移動しなければならないことになっていた。

門の向こうに憧れのタージマハールが見える。感激の瞬間だ。正面門を入ると300m程の水路の先に、世界一美しい建物といわれるタージマハールがあった。タージマハールがドーンと出現した感じだった。午前8時過ぎというのに、同じ考えの観光客ですでに混雑が始まっていた。南側の門からタージマハールの正面に入ると、そこは世界中からやって来た観光客が記念写真を撮るためカメラやスマホの前でポーズをとっていた。それでもまだ混雑前の時間帯だったので、お決まりのポーズの写真を撮ることができた。

◀正面門を抜ける



▲ドームを掴んだポーズ

インド人専用の入場口▶

▲正面門からの全景

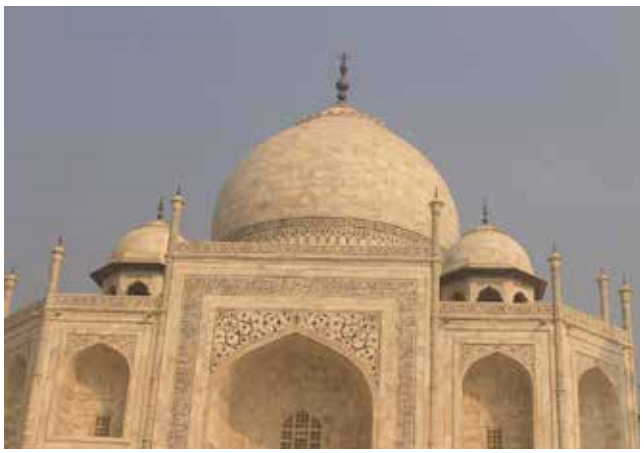
肝心のタージマハールはもう300m程前方にあるのだが、市民の朝食作りで出た煙やスモッグの影響で薄く霞んで見える。圧倒的な均整がとれた美しい姿で我々を歓迎してくれており、そこには小学生の頃社会の教科書で見たイスラム様式の白亜のお城のような建物が、４本のミナレット（塔）を従えて毅然として現実に建っていた。

タージマハールは外国人とインド人で入場料が違っていて、外国人は750Rs（約1500円）、インド人は40Rsで、外国人の方がちょっとだけ早く内部に入れる。我々はタージマハールのエリアまで来ると白い靴足袋のようなものを靴にかぶせたが、現地の人は裸足になる。

▲テラスから玄関へ

▲正面玄関

タージマハールに入場。内部に入ると、そこは非常に狭くて、すぐにいくつかの棺がホールの真ん中に並べられているのが目に飛び込んできた。その周辺は網模様の柵がしてあり、人々は網の向こうの棺を見ながら反時計回りに歩く。正面まで来るとムガール帝国第５代皇帝シャー・ジャハーンとその愛妃ムムターズ・マハルの棺が一番見える位置となる。しかしその棺はレプリカで、本当の棺はその下の地下に安置されている。もの凄い人混みで、世界中からやって来た人々に、皇帝が国家の財政を傾ける程のお金をかけて造った墓が、今の時代になっても妃への思いと帝国の威信を訴え続けていた。



▲タマネギドーム

▲網模様の柵と内部の棺

皇帝はヤムナー川の対岸にタージマハールと同じ黒い建物（＝自分の墓）を作って橋を架ける考えだったが、国家の財政が傾く程の大事業だったため、それに反対した息子が皇帝をアーグラー城へ幽閉した。結局、その夢は実現せずに、皇帝もお后ムムターズと共に現在はタージマハールに眠っていた。

▲裏を流れるヤムナー川

▲四隅のミナレット

▲建物外壁角部分

その後、タージマハールのテラスのような敷地を１周半して、敷地の両サイドに従えている貴賓宮殿とモスクへ足を伸ばした。深い彫刻が施された赤砂岩の壁や天井にイスラムの文化を感じながら、旅をしてついにここまで来たことや一番の目的を達成したことを噛みしめた。タージマハールは、１階テラスから建物の周囲を回ることはできるが、２階へ上ることはできなかった。

テラスからシンメトリーのタージマハールを見ているとその美しさのためか飽きることもないくらいだったが、今まで抱いてきた憧れを自分の目で確かめることが出来たので、大満足で感無量だった。

▲敷地内のモスク

▲テラスから見た正面門

4 アーグラー城からデリーへ

午前10時までタージマハールを見学しアーグラー城へと向かう。駐車場からバスに乗り込むとき、いつもと同じく子供たちに取り囲まれ何かを買って欲しいとせがまれる。マグネットや紙の箱などもある。後で考えれば、お茶だったのかもしれない。初めは１個2,000円としきりに言っているが、車に乗り込む頃になると3個が500円にまで値下がりしてしまった。子供たちは生活するために必死だった。

アーグラー城はタージマハールから西へ3km程の所で、バスで少し走ると門の前の交差点に到着。車を降りたら直ぐにアマル・スィン門があり、ガイドのチョウハンさんがチケット売り場で入場券を購入し入場する。日本の戦国時代の造りのように、ゲートを入ったら直ぐに右に曲がり、10mくらい進んだらまた左へ曲がって場内のスロープを上っていく。赤砂岩で出来た随分と立派な建物で、ムガール帝国の権威の象徴のようでもあった。スロープを上った丘の上に宮殿が建っていて、芝生の中庭と宮殿が現れた。

ヤムナー川沿いに聳えるこの城は、アクバル帝によって1565年に築かれたもので、内部には宮殿の建物が並び、立木や芝生の広場にはリスがチョロチョロ走り回っていた。ヤムナー川を見渡す眺めが素晴

▲アーグラー城壁

アマル・スィン門▶

▲一般謁見の間

▲「囚われの塔」の一部

▲フマユーン廟

▲中央部の棺

らしく、その先にタージマハールが霞んで見えていた。シャー・ジャハーン帝が息子によってこの城に幽閉され、后の眠るタージマハールを眺めていた所で、その場所がムサンマン・ブルジュ「囚われの塔」だった。

城にはいくつか広場があって宮殿がそれを取り囲むように建っていて、一般謁見の間や貴賓謁見の間などがある。囚われの塔は真ん中辺りで、窓からはヤムナー川越しにタージマハールが見えるという位置だ。皇帝はここからタージマハールを眺めながら一生を終えたのだ。

アーグラー城の見学終了後は、中華料理の昼食のピラフを食べた。食事がいつも不味すぎてほとんど記憶に残っていないが、ビールを飲んだことだけは間違いない。デリーに向かう車窓からはヤムナー川の岸辺で牛がたむろしているのが見えた。高速道路に乗ると、サバンナが延々と続く。周りの農地はよく手入れされており、建物が煉瓦造りのためあちこちに煉瓦工場の煙突が立っていた。

デリーに入ると渋滞が始まり車が動かなくなる。ここでの最後の予定は世界遺産フマユーン廟を見て夕食のインド料理、その後お土産を購入してライトアップされたインド門を見てから空港へ移動するというものだった。

日没となると、フマユーン廟へ入場できなくなるので、空いている道路を探して、何とか閉門に間に合った。フマユーン廟はムガール帝国第2代皇帝フマユーンの墓で、その妃が1565年に建造した。タージマハールに比べれば小さいが、インド・イスラム建築の代表作。建物内の中央には棺のレプリカが置かれていて、本物の遺体はその真下に安置されている。世界遺産に登録されたのは1993年だそう。

フマユーン廟を出ると、夕食のインド料理、お決まりのカレーである。インドのカレーはとても不味く、だいたい5つくらいの器が出てチキンカレー・豆カレー・野菜カレー・ほうれん草カレーなどなど、考えただけでももう食べたくない。6人＋ガイドのチョウハンさんで最後の晩餐だ。このインド料理はターリーというらしく、それを日本人はカレーと混同しているのかもしれない。

5 インド訪問を終えて

インドの人々の日常生活は日本人から見て悲惨なように見えるが、国中に活気が満ち満ちていた。もっと発展して近代化が進んでいるのではないかと思っていたが、昔の栄光や宗教に捕らわれた日常の様子は意外だった。経済的に自立している人も多いがまだまだ貧困が蔓延していて、教育水準も一部では高くても文盲の人も多い。日本で言う“公平”とか“平等”の権利などはこの国では通用しない。ヒンドゥー教の国ではあるがイスラム教や仏教の影響も受けた文化と日常の制約の中、一生懸命人々は暮らしていた。外国人が泊まるホテルは豪華である一方、庶民はトラックに荷物のような扱いで積み込まれて移動していた。それが大国インドなのだ。日本人はあまり興味を持たない国かもしれないが、歴史の重みと未来に向けては底知れぬポテンシャルを秘めていた。

ドバイ・オマーンへ経済・産業視察

会長　尾藤　淳一

令和５年２月、経済発展著しいドバイへの経済・産業視察旅行の案内があり参加してきましたので、報告します。視察団の団長が、前オマーンの大使だったということでオマーンへの視察も組まれるということと、私自身初めての中東地域、そしてコロナ渦で海外への訪問も３年ぶりということで、楽しみにしていました。

アラブ首長国連邦（ＵＡＥ）は、アブダビやドバイなど７つの首長国からなる連邦国で、大統領にはアブダビ首長、副大統領にはドバイ首長がなる建国50年の絶対君主制の若い国です。ドバイの度肝を抜く建造物としては、不思議なデザインの未来博物館や世界一高いタワーのバージュ・カリファです。アブダビでは、シェイク・ザイード・グランド・モスクや大統領官邸を訪れました。どれも規模が巨大すぎて写真をみても十分伝わらないと思います。若い国らしくどの建物もここ20年内に着手・竣工されたものばかりです。

オマーンでは、首都マスカットのスルダン・カブース・グランド・モスクを見学しましたが、これも巨大すぎて言葉にならないくらいです。アブダビのモスクは白の大理石でピカピカなのに対して、マスカットのそれはサンドベージュを基調とした落ち着いた印象があり、お国柄の違いが鮮明でした。また日本大使館や王家の方のご自宅に招待されるなど、貴重な経験をさせて頂きました。

ＪＥＴＲＯのブリーフィングによりますと、今回の訪問地（ＵＡＥのドバイとアブダビ、オマーンのマスカット）の両国ともに共通しているのは、産油国として経済的に潤っていること。火力発電によって水資源のないハンディを海水淡水化することで賄っていること。強烈な太陽エネルギーが降り注いでいることなどを利用して再生可能エネルギーの開発を推し進めていること、海外からの移民等を受入れ労働力を確保しているなどが挙げられます。また日本では考えられませんが、絶対君主制かつ産油国だからできるモスクや官邸への巨額投資も共通している点といえます。

そして相違点は、特にドバイに関していうと近代的な都市づくりに加えて奇抜ともいえる建物が目立って、都市としての先進性を追求していること。またジュベル・アリ・フリーゾーンにみられるように物流・製造拠点として投資を呼び込もうとしています。一方、マスカットではオマーンの自然を生かしたまちづくりにこだわり、アラブの伝統的な街並みが今でも残っています。他国からの投資を呼び込むよりも潤沢なオイルマネーを活用して、将来性のある事業に投資する姿勢も見て取れました。２つの両極端ともいえる国づくりを見てきましたが、アラブ民族でなくともオマーンのほうが住んでいて心地よく感じるのではないだろうかと思いました。

両国とも産油国でありながら脱炭素社会の実現を目指しています。新たな油田開発にどの国も消極的ですからそうならざるを得ないところがあるでしょうが、相当な費用をかけた実験や民間投資を進めています。ただ見学した範囲では特に目新しい技術といえるものはなく、数十年で切り替わっていくことには疑問があります。とはいえ日本もエネルギー輸入大国ですから、高みの見物をしている場合ではありません。脱炭素社会への取り組みの先進事例を学びながら、後れを取らないようにしなければならないと感じました。

▲未来博物館（ドバイ）

▲未来博物館の内部１Ｆエントランス（ドバイ）

▲シェイク・ザイード・グランド・モスク（アブダビ）

▲オマーン日本大使館（マスカット）

▲ＵＡＥ大統領官邸（アブダビ）

▲オマーン王族私邸（マスカット）

▲スルダン・カズース・グランド・モスク（マスカット）

▲オマーン王族私邸（マスカット）

愛媛の登録有形文化財　第４回
旧八木商店本店店舗他4件（今治市、令和3年登録）

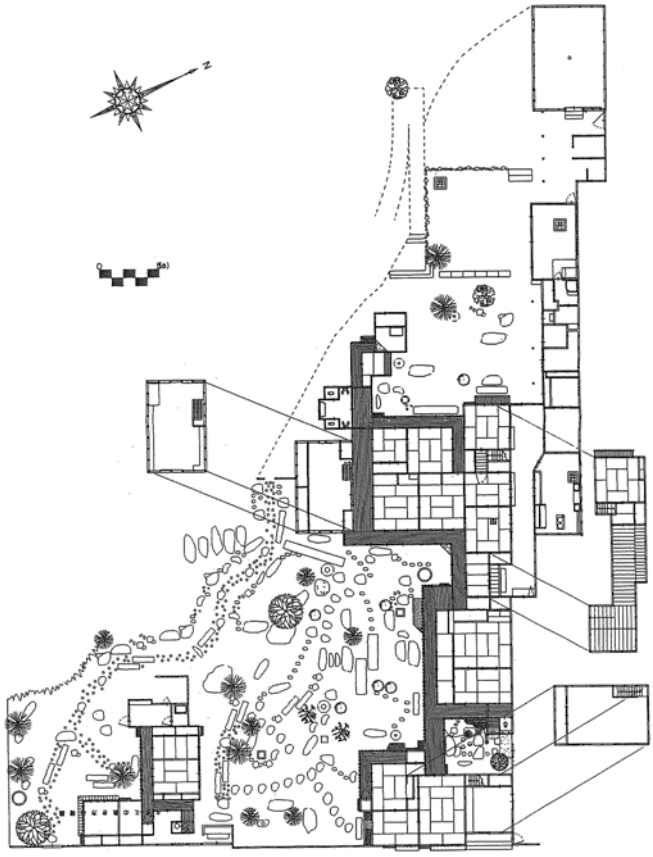
文化財・まちづくり委員会　副委員長　曽我部　準

◎全体・沿革

建物は波止浜港の本町通りに位置しています。建築主はロシア貿易漁業から蟹工船で財をなした八木亀三郎。亀三郎は屋号「枡屋」の家に生まれ明治10年（1877年）に家督を継ぎました。当時八木家は塩田を所有し廻船業で塩運送にも携わっていましたが、明治26年（1893年）にロシアに渡り鮭鱒漁業と塩蔵鮭の輸入をはじめ、さらに大正13年（1924年）には樺太丸（2831総トン）を建造し母船式蟹漁業（いわゆる蟹工船）で財をなしました。その後家督は實通（まさやす）に引き継がれさらに発展。当時の蟹工船４業者が日本合同工船（株）を設立し、後には日本水産（株）へと継承されます。小林多喜二の小説「蟹工船」では蟹工船があたかも地獄絵図のように描かれていますが、そのような船ばかりではありませんでした。樺太丸には船主の實通自らが乗船し、船内の労働環境には気を配っていたとのことです。因みに亀三郎、實通家族はクリスチャンでした。近代和風建築として明治・大正時代の実業家の暮らしぶりがうかがえる家屋敷の姿をよく伝え、建築物、庭園とも創建時のままであることにも価値があります。

◎配置

敷地東隅に道に面して店舗を建て、南に表塀を延ばし離れを造っています。外部から見る家屋敷の姿に変化をつけ景観上重要な役割を果たしています。このような建方から当初より一体的に計画建築されたものであることがわかります。店舗の奥には座敷、住居、内蔵を設けて廊下で繋げています。住居や内蔵は構造が洋風小屋組で、普請に携わったのは「木屋」の棟梁、津川喜一郎と伝えられていて、ロシアにおいて洋風建築学を学びその手法で八木邸や教会を建築した人物です。「地震請負候、火事不請負候」と家の造りへの自信を語ったと伝えられています。



配　置　図

◎店舗

大正７年建築、木造二階建、入母屋造桟瓦葺。１階は土間と店の間（12帖）、次の間（６帖）、小座敷（６帖）の３室。欅の一枚板などの良材を用いていますが、６帖の小座敷は長押を設けない略式に作った床、面皮柱、下地窓、半円の窓の意匠から、座敷へ迎える客とは異なる来客を想定したことがうかがえます。

◎座敷

大正７年建築、木造平屋建、入母屋造桟瓦葺。店舗と住居との間に配されていて10帖の座敷と7.5帖の次の

間で構成されています。入側の外側に設けた廊下から行き来し、接客空間と家人の動線を縁と廊下で分離する手法で解決しています。襖や板戸には横山大観の弟子、大智勝観の日本画が描かれた近代和風建築の好例です。

◎住居棟

大正５年建築、木造二階建、寄棟造桟瓦葺。座敷の奥側に配されていて、北側に設けられた勝手口から出入りします。店からは独立して住居に出入り出来る造りになっています。勝手口はさらに奥へ抜ける通り土間にあり、その北側には炊事場、南側に玄関の間、居間８帖、茶の間６帖、８帖の間３室が並びその奥に２室、表と裏に配置されています。南側の８帖２室は奥座敷として使われ、裏の２室は寝室として使われていたことがうかがえます。奥座敷は床柱に赤松を用い、欄間の透かし彫りに菊のモチーフがあしらわれています。炊事場の設備で目を引くのは、かまどの余熱を利用した給湯槽や流しの脇に設けられた貯水装置で、機能を重視したあたりは近代の考え方がうかがえます。

◎内蔵

大正７年建築、土蔵造二階建、切妻造本瓦葺。住居に接続して配されていて、開口枠には大島石が用いられています。その奥に便所、浴室があり、便所は手洗いを中央にして左右に同じものが設けられています。

◎離れ

大正７年建築、木造平屋建、切妻造桟瓦葺。水屋付四畳半茶室を配置しています。

今は地元のタオルメーカー「藤高(株)」が所有し、地域の資料館として再生している貴重な建物ですが、現在閉館中で見学には予約が必要です。裏山の借景がまた素晴らしく、皆さんもぜひ足を運んでみられては如何でしょうか。

※八木本店資料館は現在休館中で内部は見ることができません。イベント時には開放されることがあります。

参考：八木商店本店資料館
(http://yagishoten-honten.jp/)
愛媛県の近代和風建築p.52～55

画像協力：花岡直樹、峰岡秀和

古学堂見学会に参加して

ヘリテージマネージャー　笹木　篤

日時：2022年12月11日
場所：大洲八幡神社　古学堂
参加人数：14名

昨年12月11日、大洲八幡神社の麓にある古学堂の見学に参加いたしました。ヘリテージマネージャーの見学会は、コロナでしばらく途切れていたので、なんだか懐かしい気持ちになりました。すると、見学会の感想文を書いてくれと頼まれてしまいました。せっかくなので、八幡神社も含めてのおおざっぱな感想を書かせていただきます。

まず八幡神社の社務所にて、大洲古学堂保存会事務局の宮司・常磐井守道さんの熱のこもった説明をお聞きして神社を見学し、その後に古学堂を見学しました。常磐井さんのご自宅は古学堂のすぐ隣にあり、2018年の豪雨災害では古学堂とともにご自宅も全壊状態となりました（あくまで洪水被害上の全壊認定であって崩壊したわけではありません）。ご自宅よりも古学堂の修復を優先されたというお話には強烈な印象を覚えました。

1．八幡神社について

大洲の「お成り」と、吉田の「おねり」という２つの伝統的なお祭りが、隣り合う２つの城下町に残っていることを知ったのは、恥ずかしながらほんの数年前でした。たまたまどちらも国の重要無形文化財を目指していて、大洲の方がやや先行している、というような話を聞いたことがあり、関心を持っておりました。2019年11月の八幡神社祭礼調査報告会に参加して、これまであまり縁のなかった無形文化財についてもちょっとだけ勉強させていただきました。その「お成り」が大洲領総鎮守八幡神社を起点としているということだったので、ここが「大洲本来の中心」だったのかな、という認識を持っていました。

これとは別の視点ですが、以前地元の人から大洲は３つの聖なる山に囲まれた町だと教えられたことがありました。たぶん高山と冨士山と神南山（?）だったと思います。冨士山の頂上近くには少彦名の命が埋葬され、高山にはメンヒルが建っているということで、見に行きました。もしかしたら古代から既に聖なる場であった高山の突端にあるのが八幡神社ということになるわけです。これは訳アリの神社だ、と勝手に妄想しているところです。

そんな「大洲の中心」だけあって、ただの神社とは思えない豪壮な造りという印象でした。元々の岩を基礎にして本殿が建っているという説明は、この場所が肱川の流れを湾曲させる固い地盤であり、高山の尾根筋であることと符合し、とても合点がいきました。拝殿内部に飾られた数々の古絵馬にもただならぬ歴史を感じました。

2．古学堂

八幡神社に対してはある程度の前知識はありましたが、古学堂のことは今回初めて知りました。行ってみると、肱川がゆっくり曲がっているカーブの外側に位置しています。洪水の時には必ず外側に氾濫しやすくなります。さらに久米川との合流点でもあり、洪水が起こりやすい場所です。さらにさらに川に近い側に鉄道が走る土手が築造されているため、土手と山裾に囲まれた盆地状の場所に古学堂が建つことになったのです。土手の一部は道路で切られているので、水は侵入して溜ま

り易く、一度溜まればなかなか排水できない、という敢えて悪条件を重ねたような立地でした。今回の浸水被害も人災なのでは？？？？と思わざるを得ない光景でした。なぜこのような状況になったのか？？疑問が強く残りました。

古学堂はご承知の通り、愛媛最古の図書館であり、元禄時代に既に一般庶民の教育の場であったのですから、郷土の貴重な文化財であることは間違いありません。

古学堂本体は、平屋の学室（1780年築）と2階建ての文庫（1750年築）の2つの建築で構成されています。2つはかつて別々に建っていましたが、後に学室を文庫の隣に移築したとのことでした（絵図中央左寄りの民家の中に、右下の小屋が文庫、左奥の小屋が学室のようです）。

文庫部分は現在クラウドファンディングの資金によって修復がなされていますが、学室の修復についてはまだ資金集めの段階だそうです。

文庫部分は、完全な復元とはならず、現代的な工法も取り入れながら予算に合わせて修復するというものでした。関係者の苦労は身に染みてわかるものの、正直に言えば昭和初期と見紛うような印象を受けたところもあって、口惜しさが残りました。

大洲城復元や少彦名神社参籠殿補修復元のことを思えば、古学堂修復事業は必ず成功すると思います。なぜなら大洲盆地には水や霧だけでなく、粘り強い情熱も溜まるように思えたからです。宮司さん、関係者の皆さん、もう一息頑張ってください。

▲八幡神社の麓の民家の敷地内に、文庫と学室が見られる（写真左下）

▲右側の山と左側の鉄道の土手に挟まれた盆地状の場所に古学堂は建っている

▲古学堂南側全景

中四国まちづくり委員長会議報告

文化財・まちづくり委員会　委員長　峰岡　秀和

令和5年1月21・22日にかけて、高知県安芸市にて中四国まちづくり委員長会議が開催された。中四国9県から講師を含め24名が出席した。愛媛県からは峰岡・花岡・眞田井の3名が参加した。

▲会場となった五藤家安芸屋敷

1月21日

重要伝統的建造物群保存地区（安芸市土居廓中）にある五藤家安芸屋敷（登録有形文化財）にて開催。自己紹介の後、各県のまちづくり部会の活動報告が行われた。

鳥取県　防災について異分野（建築・医療・看護・保健）連携を考える。役割をどのように作るかＨＵＧシートで考えるようにした。ルール決めやコミュニケーションを図ることの重要性、また人数と食事の数が違う時の対応など様々なことを考えた。

島根県　空き家リノベーションを2日で計画し発表するイベント活動や、実際にリノベーションを行った事例を紹介。他地域との連携や付加価値ノウハウの提供を行った。

岡山県　木耐震模型での教育や、防災にタブレットを使用し訓練を行った。木のまちづくりとして木工教室を開催。またヘリテージサポーター養成講座にも力を入れた。

広島県　避難への備えとして「防災ワークショップたてものたんけんたい」などを行った。ＡＢに分けて家族（子供中心に）にクイズ形式で避難の方法・設備などを紹介。その後実際に建物を探検して避難を行う。

山口県　平成27年から活動。現在8名ほどが委員。歴史まちづくりの活動が主で、28年に協議会ができるなどＨＭにも力を入れている。現在51名が参加。スキルアップとして登録有形の基礎図を作成している。

徳島県　避難所で実際にどれだけの仮設住宅が配置できるか、各地域でモデル配置計画図を作成。現在、計画を立てたところのライフライン計画（電気・上下水道・ＬＡＮなど）をしている。実際に建築可能かどうかの確認を行う。中心街の空洞化についてはスタンプラリーをして商品がもらえるなどのイベントを行っている。また土壁を直すワークショップなどを開催。

香川県　15年ほど前より連絡網による訓練を行っている。200～220名ほどの方から活動ＯＫの連絡をいただく。任意団体であった香川歴史的建造物保存活用会議がＮＰＯ法人となった。まちづくり委員会がないので2027年全国大会までには作りたい。香川木造塾が木のまちづくりとして全4回の講座を開催。

高知県　海のギャラリーの登録有形に向けた再活用の講演。2019年より再発見プロジェクトを行う。様々な分野の方々の意見を聞き、海ギャラchillout委員会を発足させイベントを行う。地域資源キュレーション講座や企画展示・子育て支援など。また土居廓中の歴史とこれまでの活動についてや、伝建地区での保存修理活動について報告が行われた。

▲会場内・会議の様子

その後行われた懇親会では各県のまちづくり委員長と会話する機会があり、中四国まちづくり委員長会議が「報告会で終わるのはもったいない。この部会しかない」、というのではなく、それを各県の特色として発表、それについて議論できる場があるべきという意見交換がなされた。

1月22日

10時まで道の駅やす内にあるヤ・シィパーク横の津波避難タワーを見学した。常時開放されている施設で、展望台として一般の人々の憩いの場となっているが、非常

時には津波から避難するための津波避難タワーとなる。海のそばの施設のため、迫ってくる津波が見えるのは心臓に悪いかもしれない。だが、施設内では数日避難するだけの備蓄もあるそうで、命を守ってくれる大切な施設である。このようなタワーが何基もあるだけでなく、様々な避難施設があるそうだ。

▲津波避難タワー。海沿いにいくつも建設されている

１０時過ぎから北山めぐみさんの講演「いえとまちとひとをつなぐ」を伺った。現在赤レンガ商家の保存修理をしているところだが、そこに至るまでの苦労やこれからの活用に関しての努力、クラウドファンディングを利用しての金銭面での苦労など様々なお話を聞いた。街中の家一軒を守るという小さな一歩だが、その一歩が波紋となり、人と人をつなぎ、周辺の地域をつないでいる事を知った。

▲赤レンガ商家での北山さんの講演の様子

その後１時間ほどまち歩きをし、周囲の人々とのふれあいや、「絵金」の文化を堪能した。お昼は赤レンガ商館の竈で炊いたご飯をごちそうになり帰路についた。

▲赤レンガ商家外観

▲まち歩きで北山さんの説明を聞く委員

まとめ

中四国でまちづくり委員長会議が行われる趣旨について、時間とともに少しずつ変わり、単なる報告会ではもったいないという意見が若い建築士から出た。今後委員以外の建築士も参加できるようにし、様々な分野でつながりが持てる会にできればと思う。２日目のまち歩きはその地域の文化を知るのには大変すばらしいことで、全国の委員長会議よりも目線が近い、似た文化圏での対話は大変有意義なものとなった。北山さんの講演はまちづくりをしている人にとって勇気づけられるもので、また、ヘリテージマネージャーの保存活用という点でも大変勉強となった。皆さんもぜひ聞いていただきたい。来年度の中四国まちづくり委員長会議は徳島で開催予定だ。

全国まちづくり委員長会議報告

文化財・まちづくり委員会　委員長　峰岡　秀和

令和5年3月10・11日、東京にて第31回まちづくり会議・全国まちづくり委員長会議が開催されました。愛媛県建築士会からは峰岡・久保の2名が参加しました。前回は2年前の開催で、前々回は中止、前回はZOOMでの開催でしたので、今回久しぶりの会場開催となりました。心配していた参加人数でしたが、80名を超える参加者で、全国的に意識の高い開催となりました。今回は「歴史的環境の保全・活用と防災の両立を図る」という題目で「谷中」「千住」という町をモデルに様々な議論が行われました。

1日目

東京にある「谷中」「千住」の町を各自で実際にまち歩きをし、午後からその町について3人の講師の方から事例報告が行われました。谷中のまちづくりをしている相原昌子さんは「江戸時代の寺町である谷中は職人の町で開発が遅れた町です。まちづくりは、町が元気にならないと自分たちも元気にならない」と言われ、谷中の路地に注目し、路地をなくすのではなく路地を使ったコミュニティづくりについてお話していただきました。また、路地からセットバックすると、路地に面した家は無条件に3階建てを建てていいという防災に関した条例に対し、建築士としての景観の視点から、空の狭くなった自分たちの故郷をどう思うかと疑問を投げかけ、防災とまちづくりの両立について苦慮されたようです。

▲1日目の会場となったお茶の水ソラシティカンファレンスセンター

2人目、宮崎晃吉さんも谷中でまちづくりをされている方で、学生時借りていた木造アパート萩荘が取り壊されることになり、お別れイベント「ハギエンナーレ」を開催。1500人を集めたことを実績に萩荘が残ることになりました。その萩荘をまちの複合施設「HAGISO」として活用していくうちに、町の人が住んで作られる「まちの記憶」に気づきます。価値のないものに価値があると気づいた宮崎さんは、風呂屋や食堂などをHAGISOを中心に線でつないでいくまちづくりを始めます。その中で町をホテルの様に感じるようになり、町全体が一体の宿屋であるという考えに至り、日本まちやど協会を立ち上げ、現在に至るそうです。建築の再生がその町の再生であるとおっしゃっていました。芸大出身の感性にあふれた古民家活用法をされていました。

3人目の青木公隆さんは自らの設計事務所で仕事をされる傍ら、東京大学の助教もされている方で、千住のまちづくりをされています。空き家の利用活用をされていて、自ら購入し、ビジョンを考えマネジメントを行っています。千住の拠点となる空き家は集落モデルとして、観光客など外部の人を入れるためのものではなく、町の人々の中心となる拠点にするという目的で始めています。場所によってモデルを考えていくことが大切で、垣根（ブロック塀などの塀）を取り払うことにより、路地に対しオープンなスペース、コミュニティが作れ、そこからの利活用の方法をお話しされていました。コロナで大変な時期でしたが、なんとか2件目をオープンされるという事です。マネジメント型まちづくりファンドなど、補助型の利活用をされています。まちづくりのネットワークになればとお話しされていました。

2日目

会場を港区の建築会館へ移し会議が行われました。ワークショップに先立ち近角会長から「歴史的環境の保全・活用と防災の両立をめざす建築士のまちづくり」について講演がありました。関東大震災や空襲を逃れた古い江戸の町割りに建つ下町の町並みは景観上貴重なものであり、防災活動を阻害しないよう共存するために建築士としてどのようなアドバイス、考え方ができるかというお話をされました。そのなかで、木造家屋を水膜で覆うドレンチャー設備を組み込むことを新都市ハウジング協会が提案されていました。会長は道路の下にトレンチとしてそういった設備を埋め込むことにより、狭い道路でも木造家屋の防災が可能であることを説明されていました。今後問題解決の糸口として若手の起用を事例の継承ではなく、何かやったことのない考え方というといい結果が

▲近角会長あいさつ

生まれるとアドバイスをいただきました。

ワークショップでは5部会に分かれ、千住・谷中でのまちづくりに6部会の建築士として何ができるかを話し合いました。

防災まちづくりでは、普段づきあいの大切さを発表されました。活動が円滑にできるよう、地域からの認知が必要で、行政との橋渡し役となれるよう心掛けなければならず、地域とのつながりができることを広げられるからです。守りたいもの・大切にしたいものを再確認し、行政は災害時に手一杯になるため、一建築士として補完できるような活動をしなければならないという事でした。

歴史まちづくりでは、地域の中で誰がリードしているのか、キーマンを探しておくことが重要。また、建築基準法の様々な緩和に対し何かしらの対応をしていくことが重要で、建築士がアクションを起こすことにより、行政との連絡をとり、専門の建築だけでなくそれ以外の人々との連絡を取ることを発表されました。

景観まちづくりでは、町が持つ特性を生かし、観光目的なのかそうでないのかそれによって守る景観も違うという事や、塀を取り除くことによりコモンスペースができる、家が無くなるなどの景観が変わる時の話し合い時に建築士がかかわることの重要性、樹木なども重要な景観資源になりえることなどを発表されました。

福祉まちづくりでは、ソフトをまず充実させハードで補足しなければならない。塀をのけることにより中まで見えるまちづくりというのは見守ることにつながる、また周囲が見渡せることは周囲の変化に気づけるようにもなる。コミュニティの輪が重なっていくことが大切とお話しされていました。坂が多いところではモビリティの問題、高低差で孤立しないようメーカー等と連携し、そういった様々なデータが公開できるようになればという発表でした。

まち中・空き家では歴史的価値がある物、ないもの様々な空き家があり、そういった問題解決時に建築士自らがプレーヤーとなりコーディネーターとなりうるのではないか。構造やライフステージなどの問題に建築士が携われるのではないか。そうした場合、様々な専門家と連携をとる役割となる。空き家問題の解決に地域の人と話をしていないとビジョンがわからなくなるし、残すことが全てではなく、時には空き地にするほうが地域のためになることもあるといった発表をされました。

木のまちづくりでは、まち歩きをしながら課題を地図に書き込み、友好的なスペースをつくっていく、地域の青年団・自警的な消防団の意識を高めていく、ヒューマンスケールの居心地の良さを大切にするため消火設備の充実、予算を増やす、日常に快適なつくり、フェイズフリーについて述べられていました。

総評では、行政が提示した平面的・断面的なまちづくりでは一般の方々は理解できないまま進められる可能性がある。建築士がかかわることにより、より身近に説明できる方法を提案できるし、写真に書き込むなど、身近な世界、同じ目線から見ることができるよう心掛ける必要がある。戦後の何もない時代に比べれば空き家も宝になる。専門家も大切だが市民がいてのまちづくり。専門家を忘れて町に出ると見えなかったものがたくさん見えてくる。そういったときに専門性が光ってくるとアドバイスをいただきました。

最後に全国まちづくり委員長会議として全国の活動の様子を各地域リーダーさんがお話しされ閉会となりました。

▲ワークショップの様子

まちづくり委員会は全国的にとても活発に活動されています。愛媛県での活動も頑張っていかねばなりませんが、こういった活動をしている方々と繋がることも大きな力となります。会員の方々もぜひまちづくり会議にご出席ください。

法華寺山門（大洲市）調査報告

文化財・まちづくり委員会　委員　菅野　隆次

今、大洲の町中は「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（愛称：歴史まちづくり法）で賑わっています。この法律は、平成20年文部科学省、農林水産省、国土交通省の共管で「歴史的風致」の維持及び向上を図るために制定されたものです。

現在、様々な理由で歴史的な建造物などが急速に減少してきており「歴史的風致」が失われつつあります。

こうした状況を踏まえ、文化財行政とまちづくり行政が連携し「歴史的風致」を後世に継承するまちづくりの取り組みを国が支援するための法律がこの歴史まちづくり法です。大洲市はこの事業の認定（39府県、90都市）の中にあり、平成24年３月から継続しており、２期計画認定をすでに承認され事業が進行中です。

▲古民家活用事業

また大洲市では、この事業を「大洲市観光まちづくり戦略ビジョン」として大洲市観光まちづくり戦略会議を立ち上げ、歴史的風致文化と観光まちづくりを推進していくうえで将来目指すべき方向性を多様な関係者が共有しプロモーション、オペレーション体制等一貫性、一体性のある観光まちづくりを目指しています。またこの戦略ビジョンの理念・あるべき姿として―地域の文化を未来へとつなぐ―の理念のもと持続可能なまちづくりを目指しております。

▲蔵を改修した古民家ホテル

▲古民家を改修した店舗

この歴史的文化と持続可能なまちづくりを目指す世界中の都市を選ぶオランダの国際的な認証団体「グリーンデスティネーションズ」が「世界の持続可能な観光地」の６つの部門のうち「文化・伝統保全」で大洲市が世界一の栄誉を受賞いたしました。こうした華やかな現象とは裏腹に、伝統的な建造物には厳しい現実があり、避けて通れない状況にあります。大洲市柚木地区にある曹洞宗・盤陀山法華寺山門です。

▲風雨にさらされる山門

法華寺23世住職の残された手記『法華寺記録』によると、「本堂の落慶法要元文４年（1739）２月」とありますので、山門も280年以上前に建立されたことになります。

「矢野家五代、伊勢屋治郎右衛門が発願主となり子安観世音菩薩像を境内に建立して百四十年、無量無邊の福徳を蒙にうむる茲にここに謹みて報恩禮敬供羶のため寺号を刻み建立奉納す」と石碑に刻まれています。伊勢屋

は大洲の豪商でした。

この山門も戦後、昭和20年ごろから地盤が沈下して傾きはじめ、昭和30年山門の大改修を行いました。あれから風雪に耐え60年。ある日の事、強風に軒が煽られついに東側の屋根の大部分が崩壊となりました。

▲調査の様子

▲調査中の委員会の皆さん

当時、古学堂の改修事業の委員を務めておられた檀家の方からご相談があり、改修か撤去か法華寺檀信徒では決めかねているとのことでした。

再建するにしても現況の図面がなければということで文化財・まちづくり委員会の峰岡委員長に相談しましたら、委員会で調査をすることになりました。

まだ肌寒い3月5日、日曜日。最近の大洲の観光地は、前述の如く、ずいぶん観光客で賑わいを取り戻しています。法華寺は通称山根という地区の一番高い所にあり、当寺には、15mほどの細い坂道を登山電車のスイッチバック方式で登らなければなりません。

調査に参加いただいた6人のメンバーは、それぞれが計測七つ道具を抱えて徒歩で5分ほどで現地に到着いたしました。当山には、お二人の総代の方に歓迎していただきました。和尚様は法事の業務でお留守でした。

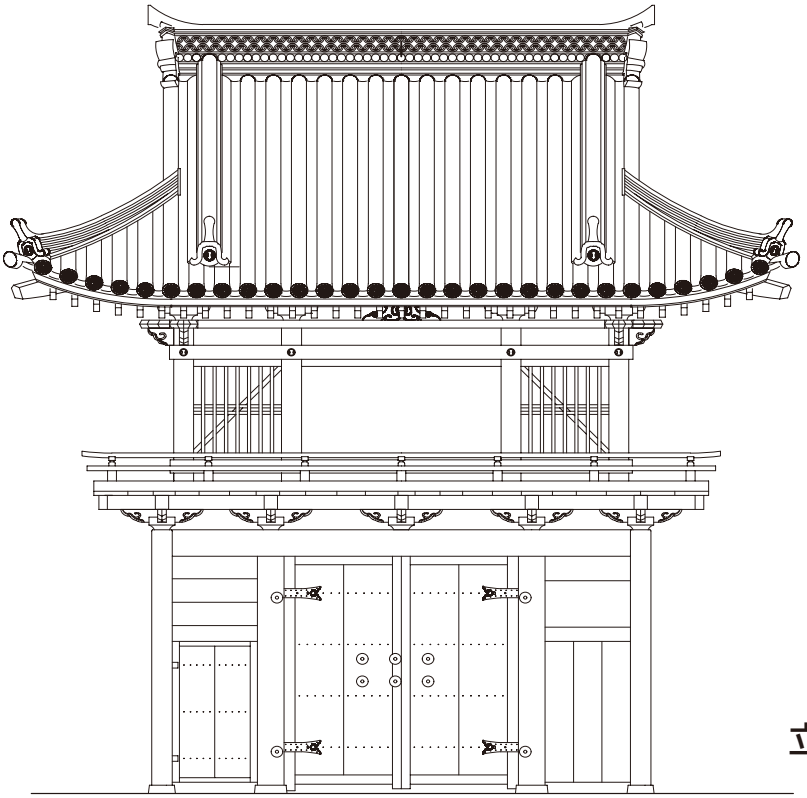
当日は快晴で少し汗ばむ陽気で、調査は順調にはかどりました。立ち会いただいた総代のお二人は、てきぱきとかつ黙々と自分達の担当を作業する姿をじっと見つめておられました。今にも崩壊しそうな屋根の調査は大変危険が伴う作業でしたが、安全には十分対処しながら計測をいたしました。2層目の格天井の表面は一尺角の杉板に絵が描かれていました。残念ながら、風雨にさらされてうっすらとしており、ジッと見つめないと見過ごすところでした。

6人それぞれの担当での計測ですべてが合致したときや、部材の収まりの一部は、分解できるほどの仕口でしたので、当時の職人たちのやり取りが聞こえるほどの完成度の高い調査内容でした。

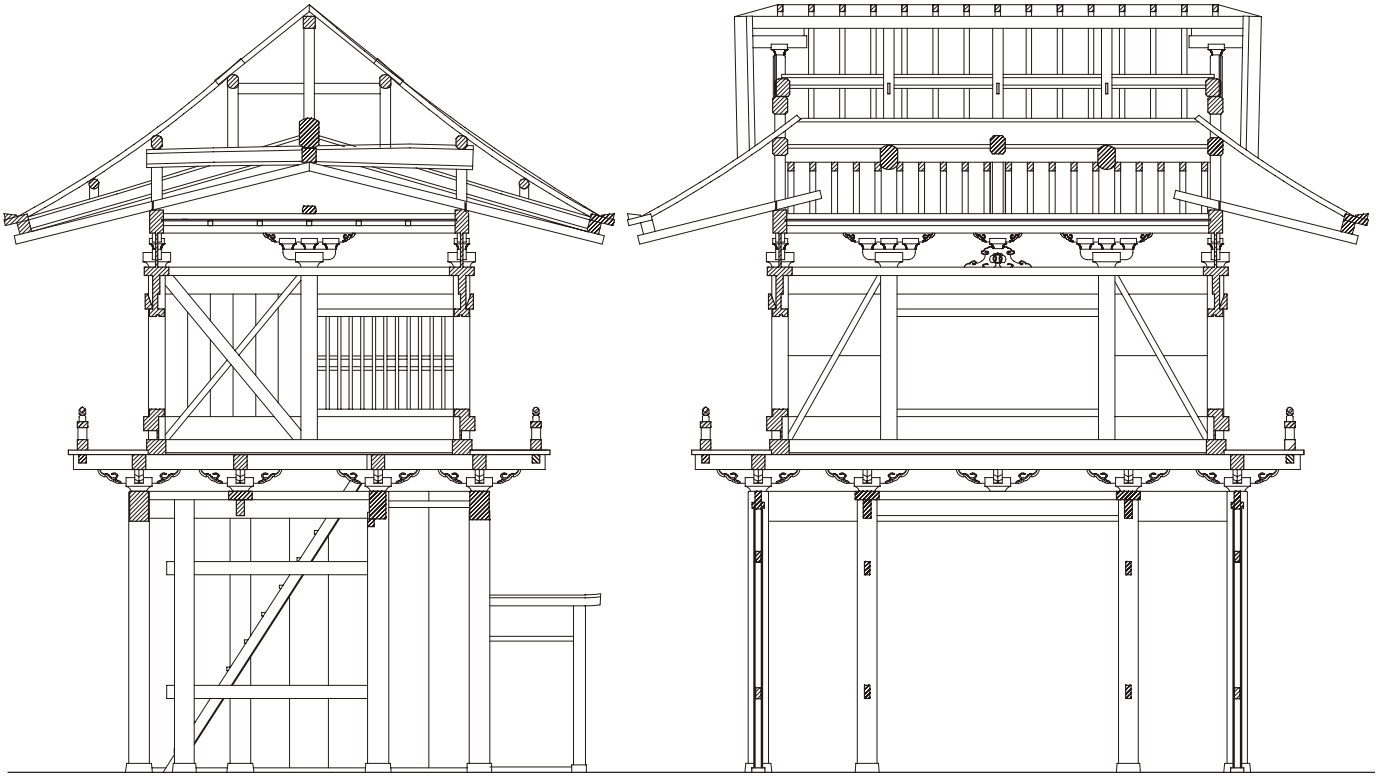
この調査記録が山門のアーカイブズとしての素材になることを、そして研究に役に立つ資料となることを願ってやみません。

▲調査に参加した文化財・まちづくり委員会の皆さん
（久保、酒井、菅野、曽我部、花岡、峰岡　6人）

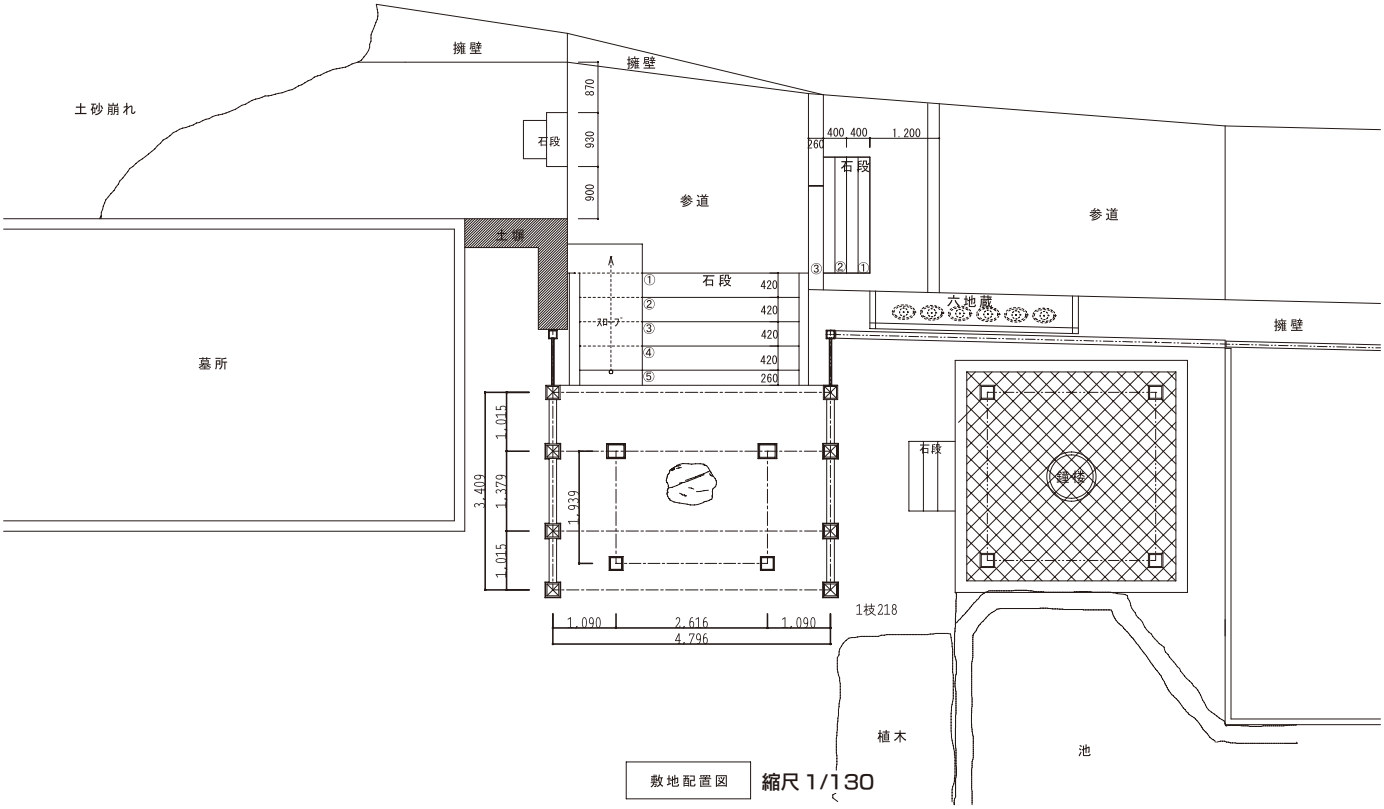
法華寺山門（大洲市）調査報告



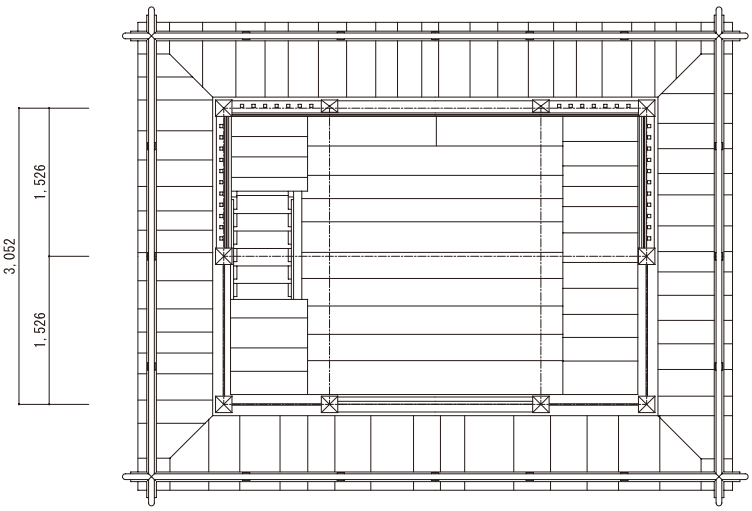
立面図　縮尺 1/70



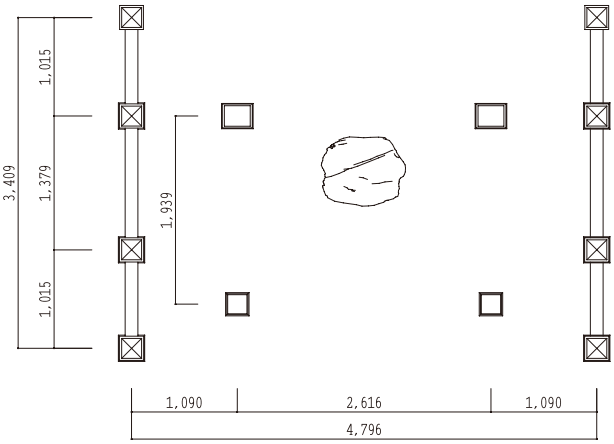
断面図



敷地配置図　縮尺 1/130



二階平面図



一階平面図

1,090 | 2,180 | 1,090
4,360

縮尺 1/78

建築市民講座「日暮別邸記念館と住友山田社宅」

開 催 日：2023年3月12日(日)
参加人数：15名

文化財・まちづくり委員会　委員長　中山　百合子

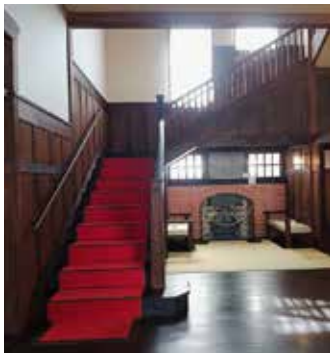
今回、新居浜市の住友山田住宅の幹部社宅と日暮別邸記念館の説明員というお役目をいただきました。

現在は新居浜市を一望する山の上に位置する日暮別邸記念館ですが、もとは新居浜市の沖合い約20キロの四阪島(今治市宮窪町)にありました。明治39年(1906)に建てられたこの洋館は、企業が所有する島にあることから一般への公開がかなわず、このまま島で改修保存することは難しいという理由で、今の小高い山の上に移築されました。

日暮別邸記念館ではその取解き工事（※部材の再利用を目的に、建物の仕組みを解明しながら部材を取り外す工事）の様子が映像で流されています。元の洋館、隣の和館、解体工事、復元工事の様子など、古い建物への敬意を示しながら真剣に作業に取り組む人々の映像は、何度見ても心打つものがありました。

さて、まだ日暮別邸記念館をご覧になっていない方のために洋館の中をご紹介します。１階には暖炉を備えた応接室、食堂、サンルームがあります。できるだけ元のままにと暖炉周囲の石や内壁を飾る杉皮までが丁寧に剥ぎ取られ、持ってこられました。中央の印象的な階段を上ると、元の寝室は資料館に変わっていますが、そこで

見られる写真や映像には昭和の活気ある日常生活が映し出され、鉱山からの汚染を広げないために住友がどれだけ心をくだいたかを示す資料も多く残されています。



日暮別邸記念館から眼下に目をやると、かつては300戸近くあったという住友山田社宅群の跡地があります。残念なことに、現在は、幹部や外国人技師のための住宅６棟しか残されていません。社宅というと、今なら家族構成により◎ＤＫ、◎ＬＤＫといった広さのマンション、アパートになるでしょうが、この住友幹部の戸建て住宅は広かったのです。昔は子どもの数が多かったのと単身赴任という発想がなかったというのもあるでしょうけれど、十分な数の家人のための部屋や女中部屋、客人用の応接間などがあり、家の裏には生垣に囲まれた広い庭もありました。会社の重役となり高級社宅の主となることは、勤め人とその家族にとって、さぞ誇り高いものであっただろうと容易に想像することができます。

失われた時代や建物の記憶をたどりたいと思われましたら、ぜひ、日暮別邸記念館、住友山田社宅、あるいは広瀬歴史記念館などにお立ち寄りください。

文化財・まちづくり委員会　委員長　和田　卓巳

文化財・まちづくり委員会主催の建築市民講座が行われ、説明役をさせて頂きました。

今回の場所となるのは、私の地元新居浜市にある住友山田社宅と日暮別邸での講座でした。

私が担当させて頂いた建物は、山田社宅にある旧住友鉱業株式会社別子鉱業所長社宅で、今治支部の曽我部さんと２人で行いました。

建物は、昭和12年に建てられた所長の社宅でして、敷地594坪、建坪104.9坪の平屋建で山田社宅の中でもトップクラスの住宅になります。建屋は、主屋11間、応接棟、茶室棟からなり、それぞれが渡り廊下でつながっています。使用されている材料も格式の高さがうかがえ、落ち着いた上質な造りでした。応接棟は、天井が高く広く感じられます。茶室棟は、本格的な茶室ではなく、客を招いての談話室のような感じでした。

この建物は、平成12年６月まで63年間使われてたそうです。また、平成29～30年に耐震補強、補修、瓦の葺き替えが行われているそうです。

今回、このような機会をいただき、私自身も勉強させていただきました。

建築文化市民講座に参加して

松山支部　相原　昌彦

「名は聞いたことあるけど…。」でしたが「良い機会！」と思い今回の見学会に参加しました。

別子鉱業所長宅は住友山田社宅の中で最も大規模な住宅です。外観は入母屋屋根の和風建物ですが、建物中へ入ると3.0m程の高い天井の洋風造りで、外観とのギャップを感じました。主屋は中廊下に繋がる和室や台所・食堂が家族の場で、座敷を経て11間続く広縁は、庭を眺めつつ奥の茶室8帖へと来訪者を導いています。100坪を超える建物ですが、平家建のせいか大きさを感じませんでした。豪華さはありませんが落ち着きのあるしつらえで、平成１２年まで住まわれたそうです。

次に住友化学幹部社宅は寄棟屋根の和風建物ですが、お城の門に使われるような鉄製の大きな丁番の玄関扉や、玄関脇の菱格子窓が洋風感を漂わせていました。こちらは台所に４帖程の勝手口がありました。門を入ると、来訪者用玄関・家族用内玄関・勝手口と出入口が３ヶ所もあり、初めて訪れた人は「どこから入れば…？」と戸惑ったかもしれませんね。応接室から広縁を経て二間続きの座敷があり、８帖間の書院の透かし彫りが角度によって表情が変わって見え、和風造りの中に遊び心を感じました。押入･地袋･天袋等の収納が随所に設けられ「引っ越しに家具を移動しなくても良いように！」と入居者への細やかな配慮が見受けられました。

住友山田社宅は、高度経済成長を果たし日本が活気に溢れていた（昭和50年）最盛期を迎え295戸･約1000人が生活していたそうです。しかし老朽化と耐震性の問題から多くが取り壊され、今は区画割りと一部残る門柱が当時を偲ばせていました。

▲委員による説明の様子

▲日暮別邸での見学の様子

▲別邸そばにある展望台から新居浜の街を望む

今回の市民講座は新居浜支部の宮崎支部長をはじめ支部の方々にご協力いただきました。お忙しいところありがとうございました。また、見学に快くご協力下さった日暮別邸記念館の皆様にも感謝をお伝え申し上げます。

文化財・まちづくり委員会報告

文化財・まちづくり委員会　委員長　峰岡　秀和

令和４年度委員会活動について

委員会会議

第１回会議　７月27日　建築士会館１階会議室
出席者６名　令和３年度の事業報告・令和４年度の活動計画の検討・部会長の決定

第２回会議　８月９日　ZOOM会議
古学堂見学会・調査について

第３回会議　12月６日　ZOOM会議　古学堂見学会・第２回写真コンテスト・市民講座について

第４回会議　１月20日　建築士会館１階会議室
市民講座・調査・来年度の予算及び活動について

第５回会議　３月２９日　建築士会館１階会議室
調査・市民講座・委員長会議報告、インスタグラム勉強会

委員長会議

中四国まちづくり委員長会議
１月21・22日　出席者３名
全国まちづくり委員長会議
３月10・11日　出席者２名

その他会議

伝木サロンZOOM祭り
９月１９日「愛媛の古建築をたずねて」について
えひめ文化財等防災研修会（西予市野村）
９月２７日
愛媛の文化財ユニークベニュー体験（内子町）
１０月１５日

見学会

12月11日
大洲阿蔵八幡神社社殿および古学堂見学会

建築文化市民講座

３月12日
山田社宅と日暮別邸記念館（新居浜市）

建築調査

３月５日
法華寺楼門（大洲市）

ヘリテージマネージャー協議会

第１回　11月８日ZOOM会議
会員募集・行政へのアプローチについて

第２回　12月23日ZOOM会議
来年度の活動について

第３回　２月23日ZOOM会議
予算・企画書・行政へのアプローチについて

活動の反省と来年度に向けて

コロナ禍も年度末には落ち着きはじめ、様々なイベントを行うことができた。今年度の計画通りの活動ができたのではないかと思う。７月の委員会からのスタートであったため、どうしても年度末にイベントが偏ってしまった。来年度はこれらを踏まえ、なるべく早く行動が起こせるよう計画したい。昨年度はＺＯＯＭ会議が主な会議となってしまったが、今年度は様々な議題に対し顔を合わせて議論が行えたことは、絆を深める意味でも良かった。次年度はまちづくりの分野でも深く議論ができればと考えている。

また、ヘリテージマネージャー（以下HM）協議会が令和４年度から立ち上がった。協議会会長は花岡直樹氏、副会長は酒井純孝氏が就任した。東予ブロック長は寺尾保仁氏、中予ブロック長は花岡直樹氏、南予ブロック長は酒井純孝氏が担当され、各ブロック単位での活動を行う。９月にとりあえずの協議会参加人数を確認し、11月より会議を開始。令和５年度には計６回の講座を東中南予で行う予定である。５月には講座内で初の総会を行う予定だ。

令和５年度の委員会計画では、防災部会から防災の勉強会、歴史文化財部会では古建築調査、景観部会からは一般人も対象とした、インスタグラムを使用した景観写真コンテストを行う予定である。また、委員会全体では八幡浜・保内で建築文化市民講座を計画している。より公益性の高いイベントを行えるよう努力していきたい。

中四国まちづくり委員長会議が令和５年度は徳島で開催される。毎年熱心な議論がされる有意義なイベントである。前回、各県委員長一人の報告会ではなく様々な分野で意見交換会をしようというお話があった。時期は現時点で未定だが、たくさんの方に参加していただきたい。

最後に

令和４年度も事務局をはじめ、たくさんの方々にご協力をいただき、委員会活動を終えることができました。特に数年ぶりに建築文化市民講座が行えたことはとてもありがたく思っています。新居浜支部・宮崎支部長をはじめ、支部の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。令和５年度もより良い委員会活動ができるよう頑張ります。

とびだせ建築士「橋をつくろう」2022年度

青年委員会　委員　髙木　伸幸

開催日：令和5年2月14日(火)
場　所：東予高校
参加者：東予高校建設工学科　1年生21名

とびだせ建築士とは……県内の高校生（建築科）の生徒を対象に、我々建築士と直接交流する機会をつくり共に学ぶことで建築の楽しさを知ってもらうことを目的とした活動です。

東予地域では、東予高校建設工学科の学生・先生に協力をいただき活動しています。コロナ感染拡大により2018年以来5回目となりますが、以前と同じく「橋をつくろう」を開催しました。

この「橋をつくろう」は身近にある材料を使って橋を作り、荷重に見立てた100角タイルを多く載せられるか各班で競争しよう、という至ってシンプルな内容です。生徒は5班に分かれ、建築士チーム1班の計6班での競争となりました。

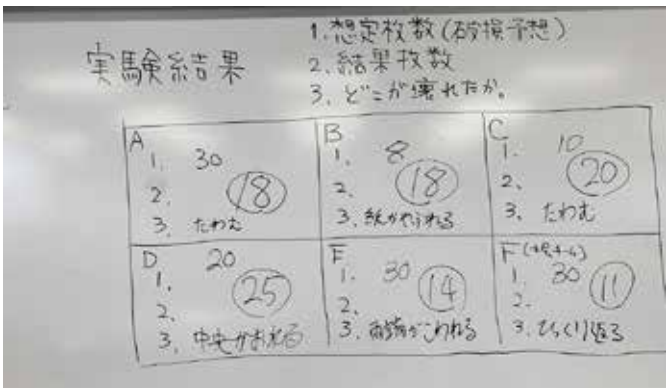
「橋をつくろう」2022年度

30㎝の間隔をあけた2本のH鋼に指定の材料を用いて橋をつくり、タイルを載せて強度を競う。

- 材料：マグネット50個、竹ひご180mm×4、割り箸1組、半紙1枚、糸1m×2本、クリップ4個、セロテープ300mm×6本、A3紙1枚(かご)、輪ゴム2本
- 制限時間：40分
- 荷重は100角タイルを用いて各班リーダーが1枚ずつ載せていく。

皆さんならどんな形の橋をつくりますか？数種類の材料を組み合わせないと届かないのがポイントです。材料の数量は決まっていますが、曲げたり切ったり折ったりすることへの制限はありません。方杖のように下から橋を支える方法は禁止としました。生徒の想像力に任せるよう、我々はアドバイスはせず「大まかな橋の形を考えて、荷重がかかると壊れそうなところをどう補強していくか考えながら作りましょう」とだけ伝え、開始しました。初めは静かでしたが、すぐにワイワイガヤガヤと意見を出し合っていました。すぐに作りだし試行錯誤する班もいれば、メインの材料をどれにするか悩んでいる班もあり時間はあっという間に過ぎました。

いよいよ各班の橋に荷重を載せ実験です。計測前に、①想定枚数と破損予想を発表し、タイルを載せて計測していきます。そして、②結果枚数③どこが壊れたかを記録します。



最高記録は25枚。生徒たちも予想以上に載って驚いていました。タイルを1枚中央に載せただけで想定以上にたわむので、端部をメインに載せ方を工夫しています。生徒たちも実験を見て楽しめました。

最後に、今回の授業では材料や時間、想定、結果検証など建築と同じ要素が入っていることや学びとともに楽しむことの大切さを話しました。

いつか高校対抗の愛媛大会や全国大会へと発展していくことを期待します。　　（青年委員会東予地区一同）

建築士チームが最下位だったのは内密に。

愛媛県建築士会創立70周年記念講演会「伊礼智講演会～心地よさのものさし～」

青年委員会　委員長　和田　崇

開催日：令和5年2月25日(土) 15：00～
会　場：道後山の手ホテル　ヴィクトリアホール
参加者：139人
主　催：(公社)愛媛県建築士会
企画・共催：愛媛県建築士会松山支部
後　援：(一社)愛媛県建築士事務所協会

愛媛県建築士会創立70周年記念事業の一環として、建築家・伊礼智先生をお迎えして講演会を開催しました。伊礼先生は住宅設計の名手で、著書も多数ある人気建築家です。

建築士会会員の菅野隆次さんが営む工務店のモデルハウス建設に伊礼さんが関わられていたことから、今回の講演会の開催に至りました。コロナ禍以降、愛媛県建築士会としては初めての大きな催しです。

当日は139名の参加者となり、満員の会場には来場者の熱気が溢れていました。

建築を学ぶ高校生や専門学校生の姿もあり、建築士会の活動や会員の顔を知ってもらうことが出来たのではないでしょうか。個人的には、地に足の付いた建築家の仕事をこれから建築を勉強する若い方に知ってもらうとても良い機会になったことをうれしく思います。この講演会は当初、建築士試験合格者に向けての入会を促進するための事業として松山支部で企画されましたが、士会の創立70周年に合わせた記念事業となりました。

長きにわたり士会活動を継続してこられた会員のみなさんやご協力いただいた方々への感謝の意味も込められています。

コロナ禍による活動の制限などこの数年は満足に士会活動が出来ていませんでしたが、魅力のある催しを企画すれば参加者も多く集まり、活気のある活動が出来ることを再認識出来ました。

最後になりましたが、伊礼先生、この機会を与えてくださった菅野さん、準備や当日の運営を一緒に行った建築士会のスタッフのみなさん、講演会にご参加いただいたみなさま本当にありがとうございました。

愛媛県建築士会 創立70周年記念講演会の裏側

松山支部　青年・女性委員会　委員長　**白石　学**

コロナ禍で、まだ先の見えなかった令和4年6月、松山支部の役員会がありました。10日前に開催された青年・女性の中四国ブロック高知大会での地域実践活動の報告会で大内さんが見事、「建築巡礼inまつやま」で最優秀に輝いた余韻に浸っていた頃でした。

久しぶりに松山支部で技術講演会を、その技術研修委員長の大内さんを主に、計画を進める話になりました。

講師は、安藤副支部長からＪＲ松山駅の再開発計画に携わっている乾久美子先生に依頼しては？とか、住宅建築の伊礼智先生とかはどうか？と提案がありました。そして、２人を候補として打診を進める様になりました。

私は、大洲の菅野建設様が、伊礼先生にモデルハウスのプランをしてもらったと聞いていたので、少し相談してみますと、簡単に話してしまいました。それがこんなに大きな事になるとは想像もせずに……。

乾先生については、松山市役所へお勤めの建築士会の方へ相談したが、担当窓口が異なるとか、直接の依頼は利害関係上できないとかで、進展なし状態。

こちらは、菅野建設の菅野社長に打診依頼したところ、早速、伊礼先生から講演会の了承をいただいとの連絡が入りました。乾先生への打診も進んでいなかった事から、今年度は伊礼智先生で進める事に決まりました。

7月末に菅野社長が伊礼先生にお会いする機会があり、その時に具体的な相談をする事になり、開催は2月で、松山での講演会と懇親会も希望と、お願いしました。

その後、8月には建築士の日のイベントがあり、その後も10月の全国大会の大内さんの発表の準備に忙しい日々に時間は過ぎていきました。

9月末に開催日を伊礼先生側から2月25日希望と連絡が入り、懇親会も了承、宿泊も可能との事でした。

同じころ、県の女性委員会のイベントの話を通じて、副委員長の永井さんが東京の設計事務所にお勤めの時、伊礼先生と同じ事務所ビルだったとお聞きしました。そこで、大内委員長、和田青年委員長、永井副委員長、そして私で、講演会の企画がスタートしたのでした。

10月の全国大会本番、発表は見事全国で最優秀でした。しかし、そのプレッシャーからか、大内さんが体調不良となりました。そしてそのまま10月も終わりました。

本格的に準備を始めた11月、航空便や宿泊等の予約もある事から、信頼のおける旅行会社へ講演会等のスケジュールをお伝えし、確認してもらった所で愕然します。何故か2月25日は、松山市のほぼ全てのホテル会場で空きが無い状態、1か所150名の会場は空いていたが、そこは懇親会ができないと。懇親会の場所を変えるか？それから、手当たり次第に公共施設なども確認して、伊予鉄髙島屋のキャッスルホールに空きがあり仮予約。

同じごろ、先生の宿泊先として確認していた、道後の山の手ホテルで150名程度の会場の空きと、懇親会もできるとの情報があり、直ぐに仮予約しました。しかし山の手は、高額になるとの事で、どちらか悩んでいました。それと同じごろに、和田委員長から驚きの話を聞きます。愛媛県建築会が70周年を迎えるので、県主催での開催になるかも……と。それから、いろいろ二転三転……。

結局、県の70周年記念講演会となり、企画は私達のままで進んでいくのですが、県の主催となり手続きにとにかく時間が掛かる事となっていきます。講演会と懇親会の案内状が関係者に送れたのは、1か月前の1月中旬になってしまいました。

講演会にしては遅めの案内にも関わらず、伊礼先生の人気で講演会は直ぐに定員150名を超え、抽選する結果となりました。

久しぶりの建築家の先生の講演会の開催なので、伊礼先生に先生の書籍の販売とサイン会の相談をしたところ、快く引き受けていただき、仕事で縁のある愛媛の老舗、明屋書店様にお願いして出張販売を計画しました。会場の下見、当日お手伝いしてくださる青年委員の方々への説明会など、慌ただしい準備の日々が過ぎました。

当日、松山空港で伊礼先生をお迎えし、会場準備を終え、無事に創立70周年記念講演会が開催できました。講演会が始まると、伊礼先生のとても勉強になるお話に130名を超える参加者は皆さま真剣に聞かれており、2時間の講演会は、直ぐに終わりを迎えました。

懇親会もとても盛り上がりました。始まってから、懇親会の人数に伊礼先生の人数を足していない事を知り、真っ白になりました（汗）。私の料理がしばらく来てなかったのは、ホテルへの無理なお願いの結果です。

翌日は伊礼先生を松山や大洲の建築へご案内し、菅野建設様のモデルハウスへ行き、無事空港まで送り届けて、伊礼先生との濃厚な2日間は終了しました。

盛大に記念講演会が開催され、伊礼先生から食事や移動の合間に建築に対する考え方、愛媛の良い感想の言葉がお聞きできて、とても良い体験となりました。

計画ならびに準備、当日スタッフとして協力いただいた皆様、関係者様へ、心より感謝申し上げます。

▲伊礼先生とスタッフ記念撮影

建築士の日の行事

住宅無料相談会

四国中央支部

実 施 日：令和４年７月30日(土)
活動内容：住宅無料相談会
実施場所：四国中央市川之江商店街アーケード内
参加者数：建築士会会員８名

四国中央支部では、四国中央市の夏のイベントである四国中央紙まつりにて、ブースを出展しました。新型コロナウイルスの影響により体験型の事業が禁止されたため、住宅無料相談会を行いました。

コロナ禍により来場者数は以前よりも少なかったものの、数名の方の住宅に関する相談を受けるとともに、耐震診断等についても説明しました。

住宅相談会と並行して紙まつり来場者に耐震診断・耐震改修の助成金に関するパンフレットを、花の種と一緒に配布しました。2時間で150部ほど配布することができました。

来年度以降に体験型の事業ができるようになれば、さらに多くの方にブースに立ち寄ってもらうことができると思いますが、一先ずご協力いただいた会員の皆様に感謝いたします。

建築無料相談会

八幡浜支部

実 施 日：令和４年８月６日(土)
名　　称：建築無料相談、「建築士の日」街頭アピール団扇配り、建築クイズ、熊本被災地写真展
実施場所：八幡浜新町アーケード内
対 象 者：土曜夜市一般通行人
参加者数：建築士会会員４名

八幡浜支部は、「建築士の日」を街頭にてアピールするため、ロゴ入りの団扇配布、建築クイズ、熊本被災地写真展、建築無料相談会を開催しました。建築クイズでは、知っているようで知らない建築用語を当ててもらうクイズや、構造上どっちが強いかといったクイズなどを出し、子供たちが建築に少しでも興味を持ってもらえるように取り組みました。子供たちも外れたら悔しいようで、何度もクイズに挑戦してくれ、建築に少しは興味を抱いてくれたかなと、こちらもうれしい気持ちになりました。

道後地区勉強会
「それって「雨漏り」?「結露」? 住宅をいつまでも健全に保つために！」

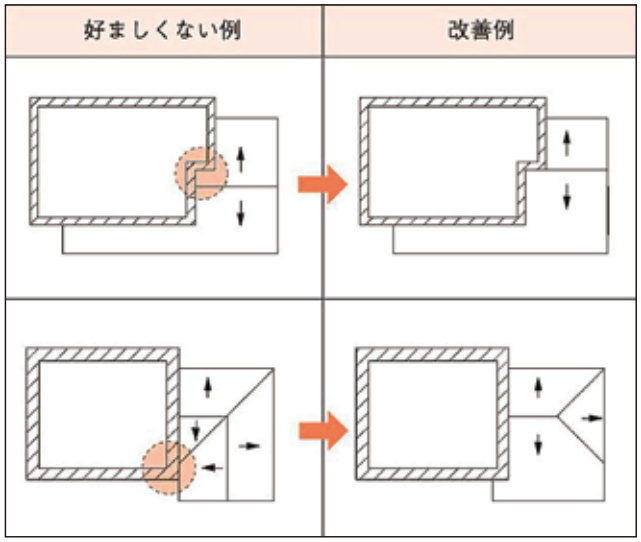
松山支部　道後地区地区長　相原　昌彦

日時：2023年2月18日(土) 15：00～17：30
場所：愛媛県建築士会会館１階会議室
講師：ケイミュー㈱ 商品企画技術開発部
技術サポートグループ　安田和生氏
参加者：勉強会15名　懇親会10名

脱炭素社会・ＳＤＧｓへの取り組みが、これからのスタンダードとなっています。木材利用促進法等が施行されて、私達も他人事ではすまされなくなり、木造の建築物がクローズアップされてきました。木材は安価で軽量・加工性に富む材料ですが、コンクリートや鉄骨に比べて、雨漏りや吸湿による腐朽や蟻害のリスクがあります。そこで今更ながら学び直したいと思い今回の勉強会を思いつきました。講師は屋根・外壁のメーカーとして定評あるケイミュー㈱様にお願いしたところ、快諾頂き開催いたしました。

○屋根についての注意点

・下屋等で壁に向かって勾配をとらない。
・棟・谷・トップライト等から納まりに必要な寸法を確保する。
・勾配が緩い又は流れが長い場合は要注意。
・下地の健全性確保のため小屋裏換気を必ず行う。



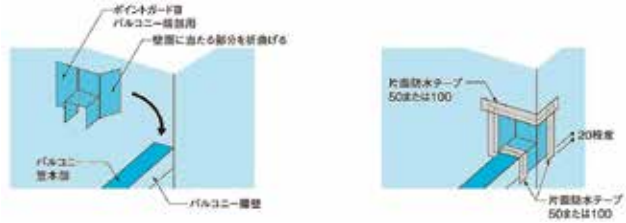
○施工時の注意点

・シーリングに頼らず、板金加工する場合は鋏で切らず八千代折りで加工しピンホールができない加工をする。

○外壁についての注意点

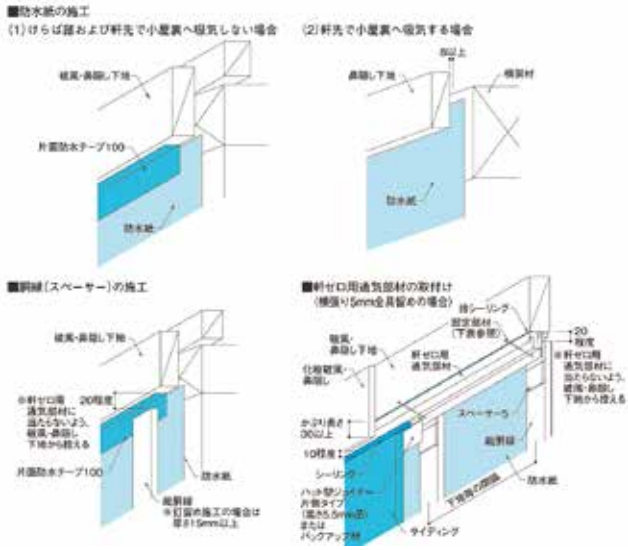
・窓廻りの防水テープはサッシ枠のツバに窓下→左右→窓上の順に施工。下図のようにはみ出さないように。

・バルコニーと外壁取合い部分は防水補強が必要。立体的成形品の使用が望ましい。



○軒ゼロについての問題点と対策

・軒の出が少なくなる程、外壁上面に雨が吹き込む。
・防水テープで鼻隠しと透湿防水シートを一体化させる。



（文中図はケイミュー㈱設計施工マニュアルから抜粋）

屋根・外壁の２部構成150分、事例を基に発生のメカニズムと対処方法を解説する濃い内容でした。セミナーで頭をフル回転させた後は、三番町へ移動し喉を潤しお腹も一杯になり「ここだけの話」に盛り上がりました。

最後に、週末にも関わらずセミナーをご準備・講師をして頂いたケイミュー㈱のスタッフ様・安田様、ご参加頂いた皆様に心からお礼申し上げます。

なんとなく、それなりに

松山支部　仙波　完太

断れない先輩（愛媛建築住宅センターの高橋健太郎さん）からバトンを受け取った松山支部の仙波完太と申します。「カンタの建築への熱い想いを書いたらええんよ」と言われてもそんなに熱くないし、そんなウィットの効いた文も書けませんがと思いながら、なんとなく引き受けたことを後悔してもしようがないので、なにか書かねばと過去を振り返ってみたところ、やはり熱さなど忘れ去られ、「なんとなく」生きてきたなと思うに至りました。

小学生の頃からなんとなく間取り図とか家の模型とかに興味を持ち建築士になろうと、なんとなく建築学科のある大学へ進学し（その田舎度合にはどうしてもっと真剣に止めてくれなかったのかと高橋さんを恨み）、それなりに大学で勉強をして、田舎大学生活を楽しみ、推薦で住宅メーカーに就職し、あれ？この工法の家しか設計できなくなるんじゃね？　となんとなく地場の工務店や中堅ゼネコンに転職して、なんとなく独立したような気がします。

独立してからも、なんとなくいただくお仕事は断らず、それなりにご依頼者のご要望には一生懸命取り組み、それなりにこなして８年があっと言う間に過ぎた気がします。この先もですが、振り返るとまあまあ綱渡りだったなと思います。「勧めんけど、こっちに来ると決めたなら応援するよ」と言ってくれた設計事務所の先輩、もう少し強く勧めてくれなくてもよかったのではと思っても後の祭りで、それでもいただいてきたお仕事のほとんどが一緒に働いたことのある先輩や元同僚、昔のお施主様からであることはとても有難いことだと感じています。

そしてなんとなく逃げてきた役が今年はいくつか回ってきて、そういう年廻りなのかと断らずお引き受けさせていただいていると、またこういうバトンまでなんとなく引き受けたおかげで、「いしづち」に投稿されている記事を見返す機会になり、高校に入学しバスケ部に入った時「リアル流川がいる！」と思っていた人が吉田栄作を気取っていたことを知って軽いショックを受けた以上に、身近に立派なご活動をされておられる方々や、見識の深いお考えをお持ちの方々がたくさんおられること、そしてなにより「建築」が好きな方々がたくさんおられること、そういや自分も好きだったけど日々、のしかかってくる仕事と育児を言い訳に、仕事以外の建築の幅を広げていなかったことを再認識できました。

初心も振り返ってみるよい機会となったことで、毎日手を合わす神棚に掲げた「First Policy」を見返すも「固い！」。

もちろん初心も大切ですが、２年後の10周年へ向け、「なんとなく・それなり」を超えた楽しい目標をたて、トライしていこう思っていると、６月に開かれる青年・女性建築士の集い徳島大会の案内が。独立してすぐに誘っていただき参加させていただいた尾道大会以来ですが、「未来創造会議」というタイトルに惹かれ、また「けんちくの輪」が広がることも期待し早速申し込みました。そして実は、楽しい建築活動をちょうど一つ始めたところでした。ＢＩＭソフトArchiCADのユーザーグループを３月に愛媛でも立ち上げ、その代表をさせていただくことになりました。

▲事務所設立にあたり自分に課したポリシー

写真はそのキックオフに集まっていただいた愛媛のメンバーと徳島・香川・高知の代表の方です。ArchiCADをお使いの方、ご興味があられる方、ＱＲコードよりどうぞお気軽にグループにご参加ください、年に６回程度の勉強会を開催していこうと思っています。ということで、なんとなく、それなりの「けんちくの輪」、「つながり」的な文章になった気がするので、次回は数千万円の住宅ローンを組んで住宅を購入されるお客様の熱量に答えてきた新入会員の花房那樹さんにバトンをつなぎたいと思います。よろしくお願いします。

▲アーキキャドの「A」

▲登録はこちらから

世界遺産を訪ねて

八幡浜支部　東野　淳

八幡浜支部長の原さんより、バトンを受け取りました東野です。建築の仕事に携わるようになって43年が過ぎ、微力ではありますが設計事務所で働かせて頂いております。

コロナ禍となって、なかなか県外へ出る機会が無かったのですが、昨年秋に京都へ行くこととなりました。娘が友人の結婚披露宴に出席する間、妻と二人で孫の世話をしながら京都市内の散策へと出かけました。まず、ホテルから近いと思って八坂神社へ向かったのですが意外に遠く、けっこう歩きました。コロナ禍の中でも多い観光客に驚きながら、境内に辿り着き、外観の朱塗りが鮮やかな国宝の本殿や舞殿を拝観。ちなみに、八坂神社は「祇園祭」が行われる事でも有名で、建物は祇園造と呼ばれる建築様式だそうです。

次に平安神宮へと足を延ばし、広い参道を通って大鳥居を抜けると、その先には朱塗りの外観が映える社殿が迎えてくれているようです。中央に大極殿、左に白虎楼、右に蒼龍楼とシンメトリーの建物配列が優雅で、豪華絢爛な建物に目を奪われました。

▲清水寺本堂

▲清水寺舞台

翌日には、中学校の修学旅行以来となる清水寺へ向かいます。ご存知の通り約千二百年の歴史を誇り、世界遺産にも認定された由緒正しい寺院です。細い参道を上っていくと、まず最初に仁王門へとたどり着きます。何段もの階段の上にそびえ立つように、鮮やかな朱色が美しい門です。

階段を上がると高さ31mと国内最大級とされる三重塔に魅せられ、仁王門や三重塔の天井や柱などに描かれた極彩色の密教仏画や彫刻に見入ってしまいました。そして本堂にお参りした後、「清水の舞台から飛び降りる」や「今年の漢字」で有名な本堂の舞台へ進みます。舞台は崖から迫り出した高さ約13mの場所に造られており、「懸造り」と呼ばれる伝統工法で耐震性の高い構造となっています（大洲市の少彦名神社でも「懸造り」が見られますね）。

▲仁王門

▼三重塔

▲懸造り

大きいもので長さ約12m、周囲約2mを超える18本の柱は樹齢四百年以上の欅が使われているそうです。先人達の偉大さと歴史を感じながら、夢中になって写真を撮っていました。

そういう訳で、何年かぶりの修学旅行をしたような気分になって、感動したり楽しんだりする事ができました。唯一残念だったのは、紅葉には少し時期が早かったという事です。

次号は八幡浜支部の藤川さんにバトンを繋ぎます。よろしくお願いします。

事務局長就任のご挨拶

事務局長　池内　誠喜

この度、４月１日付けで事務局長に就任いたしました池内と申します。

前職である愛媛県土木部建築住宅課在籍時においては、主な業務が建築行政であったこともあり、会員の皆様とは許認可や業務発注者としての関わりなど限定的なものでありました。

今、改めて士会の活動履歴を拝見しますと、取り組み内容が災害時の派遣対応や建築文化の一般への啓蒙活動など多岐にわたっていること、このために各種講習会などを実施し会員の技術力の維持・向上に積極的に取り組んでいることについて再確認することができました。

いうまでもなく現在建築士に求められているものは、安全で快適な施設を設計するという本来業務のほか、災害時における社会的役割、歴史的建造物の保存活用やまちづくりといった文化的な役割など多岐にわたり、求められる要求水準も年々高くなっている状況にあると感じています。

いささか小難しいことを申しましたが、会員の皆様と手を携え潤いのある豊かな社会を築くため建築技術者として貢献できたらと考えていますので、今後共どうかよろしくお願いいたします。

［事務局からのお知らせ］
会員の皆様、会費の納入時期です。

令和５年度の会費納入時期となりました。本会運営の財源として大きなウエイトを占める会費ですので、会員の皆様方の早期納入をお願いします。

納期は本会の定款により毎年６月末日としております。

会費を銀行口座引落しにされている方は、６月２７日（火曜日）に指定口座から引き落としさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

会費を銀行口座引落しにされている方につきましては、請求書は郵送しておりません。

請求書・領収書が必要な方は建築士会事務局までご連絡ください。

【会費は下記のとおりです。】

正会員の方……18,000円

準会員の方……12,000円

正会員+建築ＣＰＤ情報提供制度に参加の方……18,520円

準会員+建築ＣＰＤ情報提供制度に参加の方……12,520円

賛助会員……一口　10，000円（４月に請求書を郵送しております。）

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。
（尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。）

「いしづち」の次号の原稿締切日
令和5年　7月号（153号）　令和5年5月25日（木）

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。
※１ページ写真込みで2150文字（25文字×43行×横2段）のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。
写真は１ページ当たり３枚程度まで題名を付けて添付してください。
また宜しければ投稿者の写真（免許写真程度の顔写真）を添付してください。
会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。
（尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。）
この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。

情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしています。
「いしづち」編集委員会（士会事務局内）宛　FAX 089−948−0061

編集後記

渡辺明名人に藤井聡太竜王６冠が挑戦した第81期名人戦七番勝負第１局が、４月５、６日に東京都文京区「ホテル椿山荘東京」で開催され、藤井聡太竜王６冠が先勝いたしました。
名人戦は、将棋界で最も格式と歴史のあるタイトルであり、今回の第81期は将棋盤のマス目と同じ81という期数であることから、将棋界では非常に注目され特別な対局となりました。
今回、素晴らしいご縁があり、前夜祭、対局部屋での封じ手開封観戦、大盤解説会に関わることができました。その中でも一番注目したのは、対戦者お二人の対戦中の集中した表情と対局部屋の環境でした。
棋士が集中して対局ができる環境とはどの様なものなのか。
場所は、ホテル椿山荘東京の別棟にある錦水という料亭の一室です。玄関を１階だとすると地下２階のお部屋でした。建物の中央に滝が流れ建物の下を流れており、対戦室から見える池へと流れ込んでいました。
間取りは、20畳の床の間付きの和室で、西側にある掃き出し窓と内縁と外縁があり、窓からは素晴らしいお庭が見えます。池には桜の花びらが水面いっぱい広がり、ゆっくりと流れていました。その奥に小高い丘があり、大きい樹木が茂っていました。勿論外部から対局部屋を見る事はできません。
光の入り方は、軒先が張り出しており、太陽の光はお部屋に直接入ることはありませんでしたが、お庭の木々には太陽光が当たり間接的に部屋を照らし程よい明るさでした。
室温は、窓際の温度も上がることもなく、過ごしやすい温度設定になっており、エアコンの風も感じませんでした。
音は、池が流水しておりましたが音は無く、窓から見えない近くの滝から流れる音が微かに聞こえました。風がありましたが木々の葉擦れ音も聞こえませんでした。対戦直前は、私や凄い数のマスコミが対局部屋に入室しており、ざわざわしていましたが、数手指すと立ち合い人以外は退室し、将棋盤の真上、真横からの設置型カメラで撮影することとなり無音状態となっていました。
この様な素晴らしい環境のお陰で、将棋ファンたちが心熱くなる名局が生まれるのだと思いました。この環境を作り上げた建築家や庭師、関係者に敬意を送りたいと思います。

〈いしづち〉2023/5
令和５年５月発行
発行人　**会長　尾藤淳一**
発行所　**公益社団法人　愛媛県建築士会**
〒790-0002　松山市二番町四丁目1-5　愛媛県建築士会館2F
TEL（089）945-6100　FAX（089）948-0061
http://www.ehime-shikai.com
印刷所　アマノ印刷有限会社
情報・広報委員会・広報委員
委 員 長／大平　将司　　副委員長／渡邉　道彦
編集委員／河合　優志　　西岡　亜有美　　西森　勉　　花岡　晶子